九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シュペーナーの敬虔主義理論

伊藤, 利男

https://doi.org/10.15017/2332566

出版情報：文學研究. 90, pp.45-104, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

シュペーナーの敬虔主義理論

伊藤利男

第一節　『敬虔ナル要望』――教会改革の理念と方法

シュペーナーの教会改革への意欲と理念、方法は、しばしばドイツ敬虔主義の綱領書と呼ばれる『敬虔ナル要望』に力強く表現され、詳細に論述されている。同書の成立事情は、一六七五年九月八日付けの彼自身の前書きに書かれている。それによると、同年早春フランクフルトの出版業者ツンナーが、アルントの『説教集』[1]の新版の発行を計画して、その序文の執筆をシュペーナーに求めてきた。そのとき、彼自身の言葉を直接引用すると、「私は、私が神の意志と恩寵によって神のぶどう園で働きはじめた時以来、しばしば私を心から悲しませ、良心を苦しませ、大きな心配を与えてきた多くのことごとを、与えられた短い期間のうちにその序文に書きしるそうと決心した。私と同じことを嘆き、しばしばたがいに悲しい訴えを打ち明けあっている人びとがまだかぞえきれないほど多数いることを知っていたからである」[2]。

春の書籍市で『説教集』新版が発売されると、その序文は多くの共鳴者を見出し、序文だけを独立した書物にして

出版してほしいという要望が多く寄せられた。それに応えてシュペーナーは同年秋[3]この序文を、『敬虔ナル要望、すなわち真の福音主義教会の神のみ心にかなう改善を求める心からの要望。純真に改善を目ざすキリスト教徒にふさわしい若干の提案を付す』（本論では『敬虔ナル要望』と略記する）という題のもとに、その間に別々に寄せられた二人の神学者[4]の意見書を、それぞれの筆者名は伏せて、付録として付けて、同じツンナー書店から出版した。この本はその後何回か版をかさね、また一六七八年には著者自身の手に成るラテン語訳が出版されて、ヨーロッパの各国に普及していった。以下の論述には一六七六年版を底本とするクルト・アラントの校訂本を使用し、またパウル・グリュンベルクによる現代語訳抄本[5]、マルティン・シュミットによる現代語訳抄本[6]および堀孝彦訳『敬虔なる願望[6a]』を参照した。引用に当ってはアラント本のページを末尾の括弧内の数字によって示す。聖書からの引用はシュペーナーの原文に忠実であることを原則とし、必要に応じていくつかの邦訳聖書を参照する。書名略記は日本聖書協会発行『聖書新共同訳』一九九〇年版の例にならうことにする。

『敬虔ナル要望』全体の構成は、標題ページに献呈の言葉と前書きがつづき、そのあと本文が来る。本文はアラント本、従って一六七六年本では部や章・節に分けることなく、ひと続きに書かれているが、グリュンベルク抄本と堀訳本では内容に従って標題を付した三部に分かれ、その一部と三部はさらに小標題によって細分されている。ただしその標題と小標題は両本の間に文言の多少の違いがある。

献呈の言葉はこうである。

「すべてのキリストの福音主義教会の忠実な指導者たちと牧者たちに／

私たちの牧者頭であるイエス・キリストのうちにあって誠実に愛され高く尊敬されている私の父たちと兄弟

たちに／
光の父でありすべての善きものの援助者であられるお方より、
私たちが、そのお方に招かれていることによってどのような希望が与えられているか、そしてそのお方の聖徒たちが受けつぐそのお方のすばらしい遺産がどんなに豊かなものであるか、そして私たちがそのお方の示される絶大なる効験のゆえに信じている、私たちのうちにあるそのお方のかぎりない力がどれほど偉大であるか、認識する理解の照明された眼をたまわるよう、
自分自身たくましくなって、死のうとしている他のものを元気づける意欲と熱誠をたまわるよう、
私たちの騎士階級の、肉的ではなくて、神のため力強くたたかう武器によって、城塞を破壊し、神の認識に反抗する陰謀と嶮要のすべてを粉砕し、いっさいの理性をとりこにしてキリストに服従させ、また信仰する者たちの恭順が成就した時すべての不服従に報復を与える準備をととのえておく、力と勇気をたまわるよう、
天から降る雨と雪がむなしく天に戻ることがないのと同様に、神の口から出る言葉が神の心にかなうことをなし、神から与えられた使命をはたすことを、喜んで認め、そしてあなた方の奉仕によって耕された土地が、はじめ茎葉を茂らせ、つぎに穂を出させ、そのあと穂にたわわに実をみのらせるのを見るという、祝福と繁栄をたまわるよう、
どのようにしたならば、神の名があなた方の奉仕によってあがめられ、神の国がひろげられ、神の意志が成就されて、神の最も聖なる名誉となり、多くの人びとの魂の救いとなり、あなた方自身の良心の安らぎと未来永劫の栄光となるであろうか、認識する完全なる楽しみをたまわるよう、こいねがう」（2―3・傍点は筆者）。
教会の、あるいは宗教の改革を訴える文書としてまっ先に想起されるのは、一五二〇年ルターが書いた『キリスト教界の改善について　ドイツ国民のキリスト教貴族に与える』であるが、この書で彼は、「至尊にして権勢強大なる

皇帝陛下ならびにドイツ国民のキリスト教貴族の各位[7]」に、すなわち世俗の権力者に呼びかけて、教皇制度の分析・批判と教会改革の方策を展開した。それから一世紀半後、ルターによって創められた福音主義教会それ自身の腐敗・堕落を批判し改革を訴えるに当って、シュペーナーは、「すべてのキリストの福音主義教会の指導者たちと牧者たちに・・・私の父たちと兄弟たちに」、つまり教会内部の人びと、僧侶階級に呼びかけるのである。なぜ彼が始祖ルターとは対照的に僧侶階級に訴えるのか、その理由は先に読みすすむにつれて明らかになることが期待されるが、ひとつだけここで銘記しておかなくてはならないのは、『敬虔ナル要望』が王侯貴族や市民階級よりもまず僧侶たちに向けられた文書であるということである。

さて、シュペーナーが僧侶たちのために、神からたまわるようこいねがった五項目のうち、最初の「理解の照明された眼」は、『エフェソの信徒への手紙』一章十八・十九節に依拠する。M・シュミットが指摘するように[8]、彼はルター訳のその箇所[9]を借用するが、右の引用中の傍点部は変更されている。最初の「私たちが」はルター訳では「あなた方が」となっているが、これはパウロの手紙がエフェソの信徒たちに「あなた方」と呼びかけているからである。次に「私たちのうちにある」in uns は、ルター訳では「私たちに働きかける」an uns となっている。「そのお方のかぎりない力」すなわち神の力は、ルターにあってはまだ外部から「私たち」に働きかけていたのに対して、シュペーナーはその力がすでに私たちに内在するものと考えているのである。「認識する理解の照明された眼」Erleuchtete Augen deß Verstandnuß / zuerkennen は、ルター訳では「あなた方が認識できるように、あなた方の理解の照明された眼」（傍点は筆者）erleuchtete Augen ewers verstendnis / Das jr erkennen müget と書かれている。ルターの接続法 müget「できるように」という遠回しの表現に対して、シュペーナーの不定法 zu erkennen「認識する」は、それが基本的な、また無限定の当為である、という考えを証示すると言うことができよう。

第二、第三の項目が特別の典拠をもつかどうか筆者には不明である。第四の「祝福と繁栄」の祈願は、アラントが

注記するように、前半が『イザヤ書』五五章十・十一節に依拠し、後半が『マルコによる福音書』四章二八節をふまえている。そして献呈の言葉最後の項目は、『マタイによる福音書』六章九―十一節、つまり「主の祈り」のはじめの三つの願いに基いている。

この献呈の言葉の基調が祈願であることは、一読して明らかである。何のために、また誰のために祈願するのかと言えば、それは、まずこの書の標題が示すように、福音主義教会の改善のためであり、そして冒頭の呼びかけが示しているように、その教会の指導者、牧師その他シュペーナーの同僚たちのためである。教会改革の仕事はこの祈願によって牧師たちに委託される。教会改革と口で言うことは容易であるが、しかしその実行がどんなに困難なわざであるかは、心ある者みながよく知るところである。しかしこれは決して不可能な仕事ではない。シュペーナーはまず、神の召命をうけた牧師にはどんなに大きな希望が与えられているか、神の遺産がどんなに大きいかに注意を向けさせ、信仰によって人間のうちに働く神の力がどんなに偉大であるか、ということを「認識」させようとする。なぜならば、その認識があって初めて教会改革の仕事が動きだすからである。次に必要なのは、その仕事をみずから推進し、またほかの者たちを励ます「意欲と熱誠」であり、さらにこの改革運動の前に立ちはだかるどのような障碍をも打破する「力と勇気」である。そして最後に彼が示すのは、この仕事が実行されたときに与えられるであろうところの「祝福と繁栄」と、この大事業の成就にともなう「完全なる楽しみ」という成果である。シュペーナーはこれら項目すべてを神に祈願するのであるが、それは、すべては神の意志にかかっていて、人間が働く余地はない、という意味ではない。最初の項目を例にとってみると、「理解の照明された眼」はたしかに神から与えられるものであるがゆえに、その眼をもって「認識」することが人間の営みとして必要なのである。同様に、神から与えられる「意欲と熱誠」、「力と勇気」をもって人間が行動することが、教会改革のために不可欠なのである。その意味で献呈の言葉は、神への祈願であると同時に同僚牧師たちへの訴えなのである。

献呈の言葉につづく前書きは、『敬虔ナル要望』を公刊するいきさつを述べる。そのあらましは本稿の冒頭に記したが、ここでさらにそれを掘りさげて見たい。前書きでのシュペーナーの発言は、シュミットも指摘するように[10]、キリストのからだ、すなわち教会は病んでいる、という事実に規定されている。シュペーナーはこう言う。「私たちが嘆いているところの悲惨は明白である。その悲惨ゆえにひそかに涙を流すことはだれにも禁じられていないばかりでなく、他人が見ている所でも涙を流していい。人びとは心を揺り動かされて同情し助言を与えてくれるかも知れない。しかし人が苦しみ病んでいるのを見れば、薬を探し求めるのは当然である。したがって、キリストの至尊にして霊的なからだが、ある点では私たち一人一人の世話に、また全般的には私たち全員の世話に委ねられているので、いや、私たちはみなそのからだの構成員でなくてはならず、そのためそのからだの疾病を決して無縁のことと見ることができないのであるから、その体が苦しみ病んでいるとき、それを治療できる薬をどのようにして見つけ用いたらいいのか、心配するのはすべての人びとの責務である」(3—4)。

以下シュペーナーの発言の要旨はこうである。その最も有効な治療薬は、かつては、教会の重立った指導者と個々の教会の代表者が教会会議に集会して協議することであったが、そういう集会が行なわれない現在にあっては、キリスト教徒にふさわしい牧師たちがそれぞれの意見を文書にして公刊し、教会改善に役立つことをみなで熟考することが適当ではないか。すでに熱心な神学者たちがここかしこで教会改善のための意見を発表してきたが、半年前私がアルントの『説教集』への序文によって教会改善への要望を公にし、それへの提案をしたのも、神の教会への心からなる愛と、神の名誉に役だつと確信することは何一つゆるがせにすまいという願望とに基づく。今回「序文」を独立させて再び出版する目的は、たとえ少人数でも人びとの信仰が促進され、神からもっと多くの天分を授けられ照明された人びとが、真の敬神を推進する重要な仕事に真剣にとりくむよう勇気づけられることである。私たちは自分たちの教会と他の教会の欠陥をいっそう詳しく調べてその病弊を知るとともに、その治療法を探索し考究することに一生懸

命になろう。こうして見つけだされた必要な処置法は、各人が自分の教会で実行に移さなくてはならない。この仕事がすぐには成果を生みださなくても、私たちは希望をすててはならない。人間に不可能なことも、神には常に可能なのだ。忍耐強く待ってさえいれば、最後には必ず神の時がやってくるのだ。

ここで『敬虔ナル要望』本文の考察に移るが、その前に、この本でシュペーナーがキリスト教とは何か、という問題についてどのような発言をしているか、見てみよう。この問題について最初に触れるのは、ルター教会の堕落した現状を批判する第一部中の統治階級の欠陥を指摘する箇所で、「彼ら（＝統治階級の人びと）のなかで、キリスト教を身につけて実践することについては言わないまでも、キリスト教とは何であるかを知っているだけの者さえごく少数である」（14）と述べる。次いで僧侶階級の欠陥を指摘する節では、「私たちは私たちの階級（＝僧侶階級）のなかにしばしば、（中略）真のキリスト教（その本質はただ単に外面的な悪徳を慎んだり、外面的に道徳正しい生活をすることにあるのではない）を正しく理解し実践している者たちが、見かけよりもずっと少ないということを告白しなければならない」（16―17）といい、さらに「人びとは（常に私たち人間の本性の悪習ゆえに教えよりも実例によって判断したがるので）、自分たちの牧師のありようを見て、それがたしかに正しいキリスト教である、それ以上のことは何も考えるに及ばない、と思いこむ」（17）と述べる。これら発言はいずれもキリスト教をめぐる否定的状況の指摘でしかないが、しかしその裏にはキリスト教の本質についての積極的な把握がある。それはたとえば次のような先人の言葉の引用によって示される。「キリスト教の本質は、現今しばしば改めて提起されるこざかしい問題に通暁して理屈をこねくりまわすことではなくて、真の神と私たちの救い主イエス・キリストをその言葉に基いて正しく認識し、心底から畏れ敬い、そして真の信仰に基いて愛し、呼び求め、十字架と生活のすべてにおいて服従し、また他の人びとをも心から愛し、気前よく助け、私たちの人生のどのような危機にも、いや死にさえも、キリストによって

私たちのために獲得された恩寵に対する堅い信頼をもって安らぎ、そして自分たちは神とともに永遠に生きるであろう、と期待することである」(23―24)。これは十六世紀後半の神学者ダーフィト・キトロイス[11]の言葉であるという。もう一つの引用を紹介すると、「私タチノ宗教ノ本質ハ言葉ニアルノデハナク、実行ニアル」(68―69)、というのが見えるが、これは二世紀のローマで殉教したユスティヌス[12]の言葉である。

シュペーナー自身の言葉としては、教会改革の具体的方策を提案する第三部に、「キリスト教を知っているというだけでは決して十分ではない、それ以上にキリスト教の本質は実践にあるということを、人びとによく銘記させ、それを信ずるまでに習熟させることが必要である」(60―61)、という言葉が見える。同じ第三部にはまた、「私たちのキリスト教のすべては内なる人間あるいは新しい人間において存在し、その人間の魂は信仰であり、そしてその信仰のもろもろの成果が生活のもろもろの果実である」(79)と書かれている。後で見るように、「内なる人間」あるいは「新しい人間」はまた「霊的な人間」とも呼ばれ、その反対は「外なる人間」あるいは「古い人間」、「肉的な人間」である。

信仰によって内なる人間あるいは新しい人間になり、キリストの教えを実践すること、これがシュペーナーの考えるキリスト教の基本である。あらかじめ言うならば、この基本に向けて、またこの基本に従って教会を改革しようというのが、『敬虔ナル要望』の主旨である。

『敬虔ナル要望』第一部はグリュンベルクの見出しに従えば、「福音主義教会の堕落した状態[13]」への概観を行なうもので、次のように始まる。「私たちはキリスト教徒にふさわしい、些少なりとも照明された眼で、(時のしるしとその性質を正しく判断するようにという私たちの救い主の訓戒に従って)、キリスト教界全体の現今の状態を見つめるとき、イェレミヤ(九―一)とともに、『ああ、私たちの頭が水となり、私たちの目が涙の泉となればいいのに。そ

うすれば私たちは民の悲惨を昼も夜も泣くことができる』と悲嘆の叫びをあげたい思いがする」（9―10）。このようにして著者は、キリスト教世界の憂うべき現状の考察を始めるが、直接その対象になるのは、彼自身が所属する福音主義教会（＝ルター教会）である。「私たちはただ一つ私たちの福音主義教会を守りつづける。この教会は神の敬虔な道具であるルター博士を通して前の世紀に再び明示された貴重かつ純粋な福音を、外的告白に従って受けいれたのであって、それゆえ私たちはこの教会こそがただ一つ今日なお目に見える真の教会であることを認めなくてはならないが、それにもかかわらず私たちは、この教会に目を向けるとき、悲哀と羞恥のあまりその目を再び伏せないではいられない」（10―11）。この発言で特に注意しなければならない点は、「私たちはただ一つ私たちの福音主義教会を守りつづける」という言葉によってシュペーナーが、自分はあくまでもルター教会にふみとどまって内部から改革していくのだ、という決意とともに、その教会改革のための自分の言動が決して異端の非難にあたいするものではない、という信念を表明していることである。

さて、キリスト教世界の悲惨を言うときシュペーナーは、福音主義教会に属する諸王国・領邦をしばしば襲う疫病、飢饉、戦争というような、それによって正義の神が怒りを示すところの厄災といえども、この教会の霊的面での悲惨に比較すれば、ほんの些細なものにすぎないと見る。その霊的面の悲惨の原因に二つあり、その一つは、「真の教えが特に反キリスト教的なバベル（＝ローマ教会）から受けなくてはならない迫害にある」（11）というが、その論拠にはここでは触れないことにする。より重要なのは第二の原因である。シュペーナーは、「私たちの教会の悲惨のもう一つの、最も重大な原因は、（中略）私たちの教会それ自身の中にほとんどあらゆる箇所に欠陥があるからである」（14）、と述べて、最大の憂慮をもってこれら欠陥を考察するのである。

最初に指摘されるのは、「統治階級」（14）の欠陥である。聖なる約束（イザ四九―二三）に従って教会の養父と乳

母であるべき人びと、つまり教会の保護者である王侯とその后妃たちのうちで、神が彼らに王笏と指揮杖、つまり統治権と軍隊を与えたのは、彼らの権力を神の国の促進に用いるためであった、ということを想起する者が何と少ないことか。大領主たちの大部分は、宮廷生活に伴なうさまざまな罪とあらゆる俗世の歓楽のうちにくらしている。他の要職者たちも自分の利得のみを追いかけていて、すでに引用したように、「キリスト教を身につけて実践することについては言わないまでも、キリスト教とは何であるかを知っているだけの者さえごく少数である。彼らが宗教に対して見せる熱意は、真理への愛からではなくて、党派心、政治的利益にかかわるもくろみに由来している。このような統治者のもとでは、住民たちは信仰の奨励よりも妨害を受けるのである」。以上が統治階級に対するシュペーナーの批判の概要である。

同様に憂慮すべきは「僧侶階級」(15)の現状である。聖職者たちの堕落はすぐさま庶民の一般信徒たちの間へ伝染していくからである。シュペーナーは、すでに見たように僧侶階級の中に真のキリスト教を正しく理解し実践している者がどれほど少ないかを嘆いたのち、「時流に囚われた凡俗の目で見れば、非の打ちどころない生活を送っているように見える人びとにおいて、より精巧なやりかたで世俗精神が肉の快楽、目の快楽、虚栄の生活のなかにひたっているのが見える。だから、彼らがキリスト教実践原理の第一歩である自己自身の否定を決して真剣に行なったことがない、と認めざるをえない」(17)と述べる。

自己自身の否定の必要性は、前稿[14]で見たように、アルントが『真のキリスト教』で強調したところであった。しかし、職業としてキリスト教を実践しなければならないはずの牧師たちに、自己否定ができていないのが現実である。殆どすべての弊害は自己否定ができていないことから生じるのであろう。そういう弊害の第一にあげられるのは、僧職にある者の立身出世欲である。「彼らが昇進や転任、教説その他さまざまな職務をどんなに求めているか、見るが

いい。（中略）彼らはまだ古い誕生のなかにどんなに深くはまりこんでいることか、何事においても再生の真のしるしを実際にはもっていないのではないか。だからパウロは多くの箇所でこう嘆くのだろう、『人はみなイエス・キリストのことではなくて自分自身のことを追い求めている』（フィリ二―二一）」（17）。

古い誕生、再生などについては次節で詳しく観察することにする。さて、このような牧師たちを見れば人びとは、これが本当のキリスト教と思うであろう。なぜならば人間はその本性からして教えによってよりも実例によってものごとを判断したがるものだから。これは大きな躓きである。「しかし最も憂うべきことは、このような多くの牧師たちの生活と、信仰の果実の欠如とが示しているのは、彼ら自身に信仰が欠けているということなのである。そして彼らが信仰だと思って教え説いているものは、聖なる霊の照明、証言、封印に基いて、神の言葉によって喚び醒された真の信仰では決してなくて、人間の妄想である。彼らは聖霊の働きかけを受けることなく、聖書から、それも聖書の文字づらだけから、人間的努力によって、（中略）、たしかに正しい教えを把握し、それに賛同したり、またそれを他の人びとに話して聞かせることはできるが、しかし信仰の真の天来の光と生活からは遠く隔てられているのである」（17）。

このような真の信仰をもたない聖職者たちについてシュペーナーは、「彼らが愛情ゆたかな、再生した神の子たちであった、と推測することはできない」（18）と述べ、さらに「みずから神意にかなった真の信仰をもたない人びとは、そういう信仰をみ言葉によって聴衆に目覚めさせるという職分を、しかるべく果す能力がないということを、分別あるキリスト教徒は否定しえないであろう」（18）と言う。真の信仰がない牧師は、職務に適さない。このような牧師の欠陥の表われの最たるものとして、シュペーナーが力をこめて批判するのが、彼らの論争への過度の傾向である。彼はこう言う。

「論争はたしかに神学の一部をなしていて、私たちは真なるものを知ってそれに従うべきであるのみならず、偽な

るものをも知ってそれに対処できなくてはならないが、しかし論争は唯一のものでも最重要のものでもない。少なくない神学者たちはひたすら論争に殆ど全てを賭していて、私たちが法王党や改革派、再洗礼派の誤謬にどのように答えるべきか知ってさえいれば、事成れり、と思っている。」(20)。シュペーナーはこのような論争偏重の傾向に対する先人たちの批判をいくつか引用するが、ここではそれらすべてを割愛して、彼自身の発言をさらに追っていくことにしよう。彼が最も憂えるのは、論争によって神学が本来の目的から逸脱することである。

「神の恩寵によってまだ私たちが、神の言葉に基づく純粋な教えを持っているにもかかわらず、あちこちで次第々々に神学の中へ多くの異質なもの、無益なもの、むしろ世俗知の臭いのするものが導入されていることは、否定できない。ここには人が考えるよりもずっと多くの危険が潜んでいる。あの高度に照明された人ルターが、エルフルトの人びとに対して述べた次の言葉を私たちは忘れてはならない。『注意しなさい。悪魔は諸君を無益な事柄で引きとめ、必要な事柄をそれによって妨げようとたくらんでいる。奴は手の幅ほども諸君の中へ入りこむとその次には、奴が今まで大学で哲学という手でやっていたと同じように、無益な問いがいっぱいつまった題旨というやつで全身を割りこませようとするのだ[15]』。このように、人が聖書の外で聖書をこえて賢く利口になろうとすると、少なからぬ弊害がおこることが分かるが、それにもかかわらず、その実例にことかかないのである」(22)。この発言に論争偏重への警告とともに聖書至上主義を見てとることは容易であろう。

論争神学の弊害がルター以後もますます増大するばかりであったことを、シュペーナーは多くの「善意の教師たち」(24)の言葉を引用して指摘し慨嘆したのち、神学生たちにとってもそのような論争のための神学は、彼らが後日学ばなければよかったと思うほど無益なものであり、そしてそのような論争偏重から、「ねたみ、争い、そしり、猜疑の心が生じ、また知性が腐って、真理にそむき、信心を利得と心得る者たちの間にはてしないいがみ合いが起こるのである」(26)という。

このような論争神学が充満する心は、キリストとその教えの真の素朴を捉え、それを愛好することが極度に困難になる。なぜならば人間の趣好は、そういう素朴とは異なる、私たちの理知にとってもっと魅惑的な事柄に馴らされてしまい、そして人間の心はキリストの素朴をまったく無粋なものと思うようになるからである。「そしてこのような知（それは愛を伴なわない）は人を高ぶらせる（一コリ八―一）。このような知は人間の自己愛を放任する、いや、自己愛をますます育くみ強める」(27)。

以上見てきたように、僧侶階級の欠陥についてシュペーナーは、聖職者たちがキリスト教実践の第一歩である自己否定ができていないということから説きおこして、その原因をさぐり、その弊害をあばいて、そして今また自己愛の問題にたどりついた。自己とはすなわち私欲であり、私心、名誉心であるが、それらの根底にあるものこそ自己愛である。神学者たち牧師たちが自己を否定できないのは、真の信仰がないからであり、真の信仰がないから彼らは論争に熱中し、その論争はキリストの教えの素朴を顧みないで、知を尊重して、そしてそういう知をますます育成するのが自己愛だというのである。自己愛と信仰の欠如とは不可分に結びついている、というよりも一つことの表と裏にすぎないのであろう。

次に取りあげられるのは「第三階級」(28)の欠陥であるが、しかしここで指摘される欠陥は第三階級すなわち市民階級のみに属するとは言えない。シュペーナーは第三階級を統治し、真の敬虔へ導く責務をになった上層二階級が、すでに見たような状態にあるから、この階級においてもキリスト教徒にふさわしい規律が行なわれていないことは明白であるとした上で、まずイエスの言葉、「たがいに愛しあうならば、それによってあなた方が私の弟子であることを、すべての者が認めるであろう」（ヨハネ十三―三五）を引用し、愛が真のキリスト教徒を見分けるための目印であることを確認する。それは『ヨハネの第一の手紙』三―十八の言葉、「私たちは言葉や口先だけで愛するのではな

く、行いと真実とをもって愛しあおうではないか」に示された愛である。この愛を目印として見ると、キリストの弟子と称している多数の人びとの中から真のキリストの弟子を見出すことは、何と困難であろう。ことほどさように真のキリスト教の信仰者は少ないのである。

愛についてルターが『キリスト教徒の自由について』その他で説いていることは周知のとおりである。アルントの『真のキリスト教』もまた序文第七節で、「この本は、キリスト教徒はすべてを愛のうちになさなければならない、ということをも扱う」と述べ、本文では特に第一巻二二章以下で愛の実践を詳細に説いている。

さて、シュペーナーは市民の日常生活における躓き Ärgernis を順次指摘していくが、しかし世間のだれもが明らかに罪ないし悪徳と認めているような欠陥には言及しない。むしろ、一般には罪、悪徳と見なされていないけれども、その故にこそいっそう重大な躓きに注目するのである。その最初に批判されるのが飲酒と酩酊である。この悪徳が身分の高低を問わず、また聖俗の別なくはびこり、またそれを弁護する者も多く、さらには飲酒を商売の具にする者さえあるというのに、人びとは飲酒と酩酊を重大な罪とはいっこう考えない。シュペーナーはこの悪習をこう断罪する。「聖パウロ（一コリ六―十）は、酒に酔う者は神の前では不品行な者、姦淫する者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、そしる者、略奪する者よりもまっとうな者とは見なされない、と言う。彼らはすべて神の国から排除される者たちである」(29)。

次に批判されるのは、「訴訟の一般的な慣習」(30)である。「正しく点検するならば、訴訟がいずれの側からもキリスト教徒にふさわしい愛を損なうことなく、愛の枠内で行なわれることが稀であることを告白しなければならない。法廷で神の助力を利用して、裁判という手段を通じて神の助力を求めることは、たしかに不正ではないが、しかしこのような請求においても私たちは、私たちが他人からしてほしいと望むすべてのことを、隣人に対してしなければならない。しかしそれは一般に行なわれず、訴訟をおこす者の大部分は、裁判という手段を自分の復讐心や身勝手や不

逞な欲望の道具より他の何物にも用いないが、これもまた罪である」(30)。ここで批判の尺度が愛であることは言うまでもない。

市民たちは商業や手工業その他の生業に携わって生活しているが、これら職業もシュペーナーの批判の対象になる。その際、批判の基準はキリストの規律であるが、この規律が愛に基づいていることはもちろんである。彼は述べる。「これらの職業においても必ずしもすべてがキリストの規律に合致していない。いや、むしろこれらの職業の公の規則や伝統的な習慣のうちでキリストの規律にまっこうから反しているものが少なくない」(30)。その原因は、人びとが自分たちの階級の仕事の目的は、必要な品物を製造し保持することと同様に、神の栄光と隣人の福利に役だつことでなくてはならない、ということを忘れているからである。だから、最良のキリスト教徒であろうとする人びとでさえ、隣人に迷惑をかけたり搾取するような手管を弄することをためらわない。「自分を愛するように隣人を愛しなさい」(マタ十九―十九ほか)という言葉の意味はまるで考えられていない、というのである。しかしシュペーナーのこの考えは、商工業そのものを否定するのでなく、商工業は隣人愛の原則に従って営まれなくてはならないことを、彼は強調するのである。

同じこの隣人愛の原則は、財産共同体の必要を主張する。「私は私自身のものを何ひとつ持たず、すべてのものは私の神の所有であって、私はその管理を委任された家令でしかないのだから、私のものを、私が望むときに、望むだけの間、ひとり占めにするというような自由はまったくない。家長の名誉と私のしもべ仲間の必要とのために私のものを使用するよう、愛が要求するときには、私はすぐさまそれを共同の財産として差しだすことをためらってはならない」(31)。ここで「家長」を「神」に、「しもべ仲間」を「隣人」と読みかえなくてはならない。

次に批判されるのは、乞食行為である。初期キリスト教会の「きょうだいたちの間では、こじきをする必要がなかった。(中略)ところが今や乞食行為は、多くの恐ろしい罪の手段、罪の助長と隠れみのとして、真に困窮している

者たち、キリストの教えにかなう慈善をしたいと思っている人びとの苦痛として、共同体の悪弊として、私たちのキリスト教の汚点として見なされてしかるべきなのに、まったく当り前のことになってしまったのである」(31)。しかしシュペーナーの批判は乞食をする当人たちに向けられているのではない。むしろ、キリストによって豊かな恵みを与えられていながら、隣人の困窮がそれを必要とするとき、それを十分に使用しない者たちが非難されているのである。

次にシュペーナーは信仰生活のありかたにかかわる基本的な問題をとりあげる(この問題に堀訳は「行為の外面的遂行」という小標題をつけている)。それは、何によって人間は救済されるか、という根本問題である。彼はこう述べる。「私たちがただ一つ信仰によってのみ救われなければならないということ、そして、わざあるいは敬虔な行状は救済のために多少なりとも役だつというものではなくて、信仰の果実としてのみ、私たちが神に献げなければならない感謝の一部となるものである。なぜなら神は私たちの信仰に義と救いをお恵みくださったのだから、ということを、私たちは喜んで認識したい」(32)。この発言がルターの義認論を遵守するものであることは言うまでもない。

シュペーナーはさらに神の言葉である福音について、次のように述べる。「私たちは説かれた神の言葉の力を喜んで承認したい。それはそれを信じるすべての者を救う神の力である(ロマ一―十六)ことを承認したい。つまり、私たちは単に命令だからというだけで神の言葉を熱心に聴かなくてはならないのではなくて、神の言葉は、恩寵を差しだして、そしてその恩寵を、その言葉自身が聖霊の恩寵によって喚びおこすところの信仰に、手渡してやる神の手であるからでもある」(32―33)。この発言にルターの聖書主義の継承を見ることは容易であろう。

右の引用につづいてシュペーナーは洗礼についての考えを表明する。「また、洗礼とその力は私がどんなに高く称賛しても称賛しすぎることはない。そして私は、洗礼とは『聖霊による再生と改新の真の水浴』(テト三―五)であ

ると信じている。あるいは、私たちのルターが『教理問答書』で述べるように、『洗礼は罪の赦しを生みだし、死と悪魔から救いだし、そして永遠の至福を（約束するだけでなく）与える』[16]のである」（33）。洗礼はルターが遵守する二つの秘蹟のうちの一つであることは言うまでもない。洗礼、再生、改新については、第二節で改めて考察する。

もう一つの秘蹟である聖餐については、シュペーナーは右の引用に続いてこう述べる。「同様に私は、聖なる晩餐において主の体と血を単に霊的に享けるだけではなくて、秘蹟として口から食べ飲むことのすばらしい力を喜んで認識したい」（33）。

このように洗礼と聖餐の二秘蹟を尊重するシュペーナーは、いっさいの秘蹟を認めない改革派（＝カルヴィン派）教会の人びとに反対せざるをえない。「そういうわけで私は改革派教会の人びとに心から反対する。彼らは、私たちの救いの担保としてパンとぶどう酒を受けることを否認し、聖餐の力を弱めているからである。彼らは、霊的に享受される聖なる秘蹟の外にも存在するような力しか、パンとぶどう酒に認めないのである。今私はこれらすべての事柄について私たちの教会の教えを心と口をもって説いている。従ってルターの著作は、この点について他のどんな著作家の書物よりも多くのことを見出すことができるので、私にとってたいへん有益である」（33）。

この発言によってシュペーナーは改革派への批判とルター教会への忠誠を宣明するのであるが、しかしその一方で、「私は多くの人びとが福音主義教会信徒と称しながら、私たちの［福音主義の］教えと教会の信条に反して、これらの問題についてまったく違った考えと妄想を作っていることを、どうしても否定できない」（33）、と述べるのである。では、その人びとはどのように違った考え、妄想を作っているのか、シュペーナーは右の引用に続いてこう述べる。「何と多くのものたちがキリスト教徒らしからぬ生活をしていることか。彼ら自身、あらゆる点で規則から離れていることを、否定できないほどである。彼らは今後は生活を改めようという決意もせずに、自分たちは救われると堅く思いこんでいる。その根拠を問えば、彼ら自身告白するところによると、私たち［人間］が私たち自身の生活に基づ

いて救われるわけにはいかない以上、自分たちはキリストを信仰し、キリストにいっさいの信頼をおくのだ、だから自分たちはこの信仰によって救われることはまちがいない、ということを当てにしていることが分かる。彼らはつまり、信仰しているという肉の思いこみを、本当に救いをもたらす信仰と見なしている（というのは、神意にかなった信仰は必ず聖なる霊をともなうが、それはしかし故意の、かつ優勢な罪と並び存することはありえないからである）が、これは悪魔の恐ろしい欺瞞であって、安心しきっている人間のそのような妄想によって救われるとすることが、これまでも誤りであったし、またこれからも誤りでありうるのと同然である」（33）。では、そのような妄想ではない真の信仰とはどういうものであるか、シュペーナーは、ルターが『ローマの信徒への手紙の序言』で述べたところの次の言葉を引用する。

「信仰とは、ある人びとが、これが信仰だ、と考えているような、人間の妄想や夢想ではない。彼らが、生活の改善も善いわざも生じていないことが分っていながら、それでも信仰について多くのことを聞いたり話したりすることができるとすれば、彼らは誤謬におちいっていて、そしてこう言うのである、『信仰だけでは不十分だ。義とされて至福を得るためには、わざを行なわなくてはならない』と。こんなわけで彼らは福音を聞けば、早とちりして、自分で自分の胸のうちに一つの考えを作ってしまい、その考えが、『私は信じている』と言う。すると彼らは、これを本当の信仰と見なすのである。しかしそれは、心の奥底があずかり知らない、人間の作りごとであり、人間の考えであるから、それは何も行なわないし、どんな改善もそこからは生まれてこない。

信仰は私たちの内部で行なわれる神のわざであって、それは私たちを変化させ、私たちを神から新しく生まれさせ（ヨハネ一―一三）、そして古いアダムを殺して、私たちを心も、気持も、理念も、すべての力も、まったく別の人間にし、そしてかならず聖なるみ霊を伴ってくる。ああ、信仰とは生き生きした、いそいそしい、よく働き、力強い

ものだから、絶えず善を産みださないではいられないのだ。信仰はまた、善きわざが行なわれるべきかどうか問いもせず、問われるよりも先に、善きわざをしてしまい、そして常に善きわざを行なっているのである」[17]。

信仰についての空しい肉の妄想とともにシュペーナーが厳しく批判するのは、「み言葉と秘蹟という神的な手段のがわから」(34)つけ加わるところの、「外観ノミノ行為 opus operatum」(35)に関する恥ずべき妄想である。これは信仰についての妄想に劣らず有害で、多くの人間を永劫の断罪に導くものである。「洗礼を受け、説教で神聖な言葉を聞き、懺悔を行なって罪の赦しを受け、そして聖餐式に行くことが、キリスト教のすべてであり、そうすることによって自分たちは十二分に神への奉仕を行なったのだ、と思っている人びとが少なくないことを、私たちは否定することができず、日々それを見聞して確信している」(35)。

このような外見上の信心が真の信仰でないことを強調するために、シュペーナーはさらにアルント『真のキリスト教』から引用する。「私は洗礼を受けたキリスト教徒で、神の言葉をけがさず、神の言葉を聞き、聖餐の秘蹟をいただく。私はまたキリスト教信仰のすべての箇条を信じ告白する。だから私には欠けるものはありえない。私の行いは神のお気に召すにちがいなく、だから私は救われるにちがいない。こんなぐあいに今や世の人びとはみな推論し、そういうことのうちに義が存すると考えている」[18](35)。

洗礼を受けたからといって、それだけでは真のキリスト教徒ではない。シュペーナー自身は次のように述べる。「あなたの神がたしかにあなたに洗礼を授けられた。あなたはただその一度だけ洗礼を受けることを許されている。けれどもそれは神があなたと契約を結ばれたということである。それは神のがわでは恩寵の契約であるが、あなたのがわでは信仰と安らかな良心の契約である。だから、それはあなたの生涯の間つづかなくてはならない。それで、もしあなたの方でこの契約を守らなかったならば、あなたが洗礼とそこで約束された救いの恩寵をどんなに頼りにして

いても無駄である。でも、もしもあなたがそれに離反していたならば、心からの悔い改めによって再び戻りなさい。あなたの洗礼があなたのために有益であってほしいと思うならば、それは生涯たえず働きつづけなければならない」(35)。

次にシュペーナーは神の言葉を聞くことについても、それが単なる外見だけの行為となることを戒しめる。「あなたはまた神の言葉を聞いている。それは正しい。しかしあなたの耳が聞くだけでは不十分である。精力と活力を受けとることができるよう、心の内にまで浸透させ、その天上のご馳走を消化させなさい。さもないと、神の言葉は一方の耳から入って他方の耳から出ていってしまう」(35—36)。

同様に告解と聖餐も、もしそれが外面ノミノ行為であったならば、救いのよすがになりえない。「告解と赦罪についても同様である。これは福音の慰めの力強い手段であり罪の赦しであると、私はもちろん考えているが、しかしそれは信じる者たちの場合だけである。上に述べたような真の信仰を少しも持たない多くの者たちが、どうして慰みを得るだろうか。彼らは間断なく悔い改めようという心がないにもかかわらず、告解し罪の赦しを受けている。彼らの考えでは告解と赦罪は、自分たちは告解して赦罪を得たのだから、自分たちにとって有益だ、というわけである。聖餐に際しても同様である。はなはだ多くの人びとは、自分たちはこの聖なるわざを行なっている、またこれまでも何度も行なってきた、ということばかり考えている。しかし自分たちはそれによって霊的生活を強めているか、心と口と倣い従いによって主の死を宣べ伝えているか、主が自分たちの心の中で働き支配しているかどうか、自分たちは古いアダムを今なお王座につかせたままでいないかどうか、ということを殆ど考えない。こんなことでは、私たち福音主義教会のがわが非難している法王党の外観ノミノ行為という有害な誤謬をこっそり再導入していることになる」(36)。

第一部の最後に扱われるのは、これまで見てきた福音主義教会の堕落や欠陥が、外部の人びとにどのような作用を及ぼすかの問題である。まず、福音主義教会区域に居住するユダヤ人たちの場合について、シュペーナーはこう述べる。「[福音主義教会の] このような状態に対してまず第一に腹を立てているのは、私たちの間に住んでいるユダヤ人たちで、彼らは不信仰を強められている、いや、主の御名を冒瀆するよう動かされている。私たちがキリストの命令を守らないのだから、彼らは私たちがキリストを真の神と見なしているとは信じることができないのである。あるいは彼らは、キリストとその教えを私たちの生活ぶりから見て評価するとき、キリストは悪人だったと判断せざるをえないであろう。ユダヤ人たちが私たちに感ずる不快の念が、この気の毒な人びとのこれまでの頑迷の大きな原因であり、彼らの [キリスト教への] 改宗の妨げになっていたことは、否定できない」(36—37)。

次に指摘されるのは、「あらゆる種類の邪宗の信徒たち」(38)の場合である。とりわけルター教会に対して敵意をもつ法王党は、ルター教会の現在の欠陥が福音の教えと宗教改革の果実であるかのように、はやしたてることをやめず、多くの刊行物によって私たちを非難しつづけている。それによってさらにまた他の多くの善良な人びとは、ルター教会がローマ教会同様バベルにはまりこんでいる、だから私たちがバベルから脱出したなどと公言することはできないのだ、というように考えるに至った、というのである。

しかし、とりわけ深い憂愁をもってこの事態を見つめているのは、真に敬虔な人びとである、という。彼らはこの状況を目のあたりにして、さし当ってこれを救う手段を見出すことができないで、事態のいっそうの悪化を見守るしかない。「彼らは愛するダヴィデの言葉を幾度借りることか、『神に逆らう者に対する燃える怒りが私を捕えています。彼らはあなたの律法を捨てさる者です』(詩一一九—五三)、『私の目は川のように涙を流しています。人びとがあなたの律法を守らないからです』(一一三六)・・・」(39)。彼らは心から神を愛すれば愛するほど、神の名の尊崇と神の国の拡大と神の意志の具現が促進されることを願えば願うほど、ますます心を痛める。彼らにとって、このような

躓きのもとで世俗に汚されることなく自己を保持することは、困難になろう。そして彼らは、自分はそうはならなくても、家族の者たちがついにはこのような悪の流れにさらわれ誘惑されるのであるまいか、と憂えている、というのである。

他方ではまた、ルター教会のこの状況は、異端の諸宗の、とりわけローマ教会のもとにあって、その嫌悪すべき状態をかなり認識してルター教会に改宗を試みてしかるべき者たちにとって妨げになる。彼らは自分たち自身の側に誤謬と戦慄を見てとり、従ってキリストの真の教会があったならば喜んでそれに加入したいと思っているにもかかわらず、結局のところこう考えるようになる。「この世にはもはや純粋な教会は存在しないにちがいない。神の子らはまだバビロンに捕えられたままで、神の救いを忍耐強く待ち、そしてそういうバビロン的な隷属状態のなかにあって、畏怖し戦慄しつつ、またどんなにしたたかな嫌悪も、その他の嘆息も抑えつけて、神にできるかぎりの奉仕をしなければならないのである」(40)。彼らはこれよりほかに手段がないと思って、心のたえまない動揺と不安のうちに生活する。彼らは福音主義教会を自分の教会と同様に真の教会ではないと考え、両方ともバビロン的なごちゃまぜと見なし、たがいに相手に与えるところが少ないので、私たちの福音主義教会へ改宗することは意味ないことと考える、というのである。しかしまたこの人びとの考え方もシュペーナーの批判の対象になる。なぜならば、彼らの教会の教えが神の言葉に反しているのに対して、福音主義教会は少なくともその教えにおいては神の言葉と一致しているのだから、彼らはこの純粋な教えを宣べる私たちの教会に加入する義務がある、というのである。

以上のようにシュペーナーは彼が属するルター派福音主義教会の現在の悪弊と欠陥をさまざまな角度から指摘し批判したのち、だからと言って福音主義教会をバベルと同列に並べるならば、それは明らかに行きすぎである、と強調する。敬虔な人びとが教会の悲惨な状態を嘆くのは、教会を改革することの必要を訴え、たがいに励ましあって主のみわざをこれまで以上に真剣に推しすすめるためである。彼はこう書く。「私たちは神の栄光と教会への愛ゆえに、

教会を改善し、敬虔な人びとの心の願望をみたし、迷える人びとのために真理の認識への門を広く開いてやるよう努めなければならない。私たちはこれらの欠陥のすべてをいっそう念入りに吟味できるよう注意ぶかくならなくてはいけない。敵対者たちは私たちが指さすまでもなくそれら欠陥を十分に知っているのだから、私たちは自分たちの欠陥に目を閉じてばかりいてはならない。いずれにせよ、主に属する者はだれであれ、ともに共同のことがらとしてこの問題に可能なかぎり力をつくさなければならない」(43)。以上が『敬虔ナル要望』第一部の概要である。

『敬虔ナル要望』第二部は、堀訳に倣えば「教会改善の可能性」と題される(グリュンベルク抄本は「教会のよりよき状態の可能性」)。第一部で批判された教会の堕落を測る最も重要な尺度が聖書に求められたのと同様に、教会改善を招来する可能性もまたまっ先に聖書のなかに尋ねられる。シュペーナーは第二部を次のように始める。「私たちは、聖書を正しく読むならば、神がこの地上におけるご自身の教会によりよい状態を与えることを約束したもうことは、疑うことができない」(43)。

シュペーナーが右のように述べる根拠は、まず第一に使徒パウロのすばらしい予言(ロマ十一―二五・二六)である。つまり、「たくさんの異邦人がやってきたあと、イスラエルの民のすべては救われることになる。だから、これまで頑なだったユダヤ人たちの、すべてではないにせよ、いちじるしく多くの者が主のもとへ向けられることになる」(43)というのである。また旧訳聖書でも多くの箇所で預言者たちが同じ方向を目指しているという。

第二の根拠として、「私たちは教皇派ローマ[教会]のより大きな没落を期待できる」(47)という。たしかにルターの宗教改革はローマ教会に大きな打撃を与えたが、しかしローマ教会の宗教的支配権は今なおあまりにも強く、『黙示録』十八・十九章の預言がどんなに強い調子の言葉で書かれているか、考えてみるならば、その没落の預言が完全に実現されたと主張することはできず、より大きな没落がこれから期待できる、というのである。

さて、右の二項目が現実となったならば、真実の教会の全体が今よりもはるかに幸福な、すばらしい状態におかれるであろうことは、疑いをいれない。というのも、ユダヤ人たちがキリストの福音の教会へ改宗するときには、すでに見たユダヤ人たちの躓きについての考察から推測されるように、真実の教会はすでに今よりももっと聖なる状態になっていなければならないからである。あるいはまた、もしユダヤ人たちが神の力で、私たちには予見できないようなやり方で改宗させられるとすれば、そのような新しく改宗した民の実例が、私たちの教会にいちじるしい変化と改善をもたらすものと考えられるからである。また、反キリスト的なローマの躓きが除かれるだけではなくて、今ローマ教会区域において重苦しい専制のもとにくらしていて、ルター以前の人びと同様、どちらに向いたらいいのか分からないまま、救済を切望している人びとが、専制の絆から解放されて、福音の自由へ導かれるならば、それは大きな貢献となるであろう、とシュペーナーは説くのである。

そして、「以上のことは神から私たちに約束されているのだから、その実現にも必然的にその時がある。主の言葉は一語たりとも無駄に地上に落ちることなく、実現しないままになることがないからである。しかし私たちがその実現を希望するとき、無為のままそれを待っているだけでは不十分であって、ソロモンがうつけ者と呼んだ者たちと同じように、願望が実現しないまま死んでしまっては何にもならない。一方でユダヤ人たちの改宗と教皇制の霊的な弱体化とに、他方では私たちの教会の改善に、遅怠なく取りくむことが、私たちみなの責務である」(45)、とシュペーナーは述べて、旧約から「あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から助けと救いがユダヤ人のために生まれてくるでしょう。しかしあなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう」(エス四―十四)という句を引用する。

ところでシュペーナーは教会改革への要望と計画を語るとき、決してその絶対的な完全性を追及しようとは考えない。「だれもこの際、私たちがあまりにも多くのことを意図し求めている、などと考えないでほしい。私たちはプラ

トンの共和国にくらしているのでないから、すべてのことがそのように完全であり、規則どおりに行なわれるということはありえない。だから、時代の悪しき状態を怒って嘆くよりも、憐んで耐えるがいい。完全性を求めようとすれば、この世を去ってあの世へ行かなければならない、あの世へ行ったならば何か完全なものに出会うかも知れないが、それまでは何も希望できない、と異議をとなえる人びとには、私はこう答えよう。第一にたしかに完全性を求めることは決して禁じられていないし、私たちもそれを求めるよう、せき立てられている。完全性を獲得することは、どんなに願わしいことか、しかし他方では私は白状したい、私たちはこの世では完全性を手に入れないということ、敬虔なキリスト教徒は前進すればするほど、まだ自分にはどれほど多くのものが欠けているか、いっそうよく分かるようになるであろうということを。だから敬虔なキリスト教徒は完全性に向って努力をしているとき、完全性の幻想から最も遠く離れているだろう。（中略）私たちはこの世においては、何ものもそこへ付け加えることができない、あるいは付け加えてはならないような完全性に達することはないであろうが、それにもかかわらずある程度の完全性に到達する義務を負っている」（47-48）。

要するに、人間にとってまったく欠けるところのない完全性は来世において初めて得られるであろうような理想であっても、キリスト教徒たる者はすでに現世においてある程度の完全性に到達することを義務づけられているのである。それはまた、信者たちが集まって作る教会についても当てはまることであって、完全無欠な教会をこの世に作ることは不可能であっても、ある程度まで完全な教会を実現させることは決して不可能ではない。「しかし私たちは、一本の雑草も生えていないほどきれいな小麦畑には決して出会うものでないということをよく知っているので、私たちが教会に求める完全性は、たった一人の偽善者もそのなかにいないというような完全性であるとは理解しない。それは、教会が明白な躓きを免かれているということ、そして躓きを負わされた者はだれでもそれ相応の懲罰なしには教会にとどまることを許されず、最終的には除名もあるということ、しかし教会の真の成員はたくさんの果実によっ

て豊かに充たされる、という意味に解される」(48—49)というのである。

このようなある程度まで完全な教会の実例としてシュペーナーは初期キリスト教会をあげて、次のように書く。「そこから、初期キリスト教会で可能であったことは、今でも決して不可能ではない、ということが証明される。教会史もまた、初期キリスト教会はたいへん幸福な状態にあって、キリスト信者たちはみな共通してその敬虔な生活によって見分けられ、他の人びとから区別されていたことを証言している」(49)。彼は初期キリスト教会の状態とその信徒たちの生活行状に関する当時の証言をいくつか引例するが、その再録はここでは省略して、ただ一つ指摘しておきたいのは、シュペーナーが初期キリスト教会のあり方を実際に再現可能なものとして把え、従ってそれを教会改革運動の一つの目標としていたことである。「あの時代のキリスト教会の状態は、私たち［現在のキリスト教徒］の冷淡で不決断の態度を恥じいらせるものであるが、それにもかかわらず、それは私たちが求めるものが不可能でないことを示している」(52)。

現在の私たちは初期教会の称賛すべき状態からあまりに遠く隔てられているが、これは私たちの責任であるといい、そしてその距離はどこから由来するかについて、シュペーナーはこう述べる。「初期のキリスト教徒たちのうちにあってすべてを行なっていたのは、まさに聖なる霊である。聖霊は神から私たちにも授けられていて、今日でも聖化のわざを私たちのうちで行なうのに無能力であったり、ぐずぐずしたりしているのではない。だから、原因はただ一つ、私たちが聖霊に私たちのうちでそのようなわざを行なわせず、聖霊自身を妨害しているからである」(52)。人間が聖霊を妨害することをやめ、聖霊が自由に働くことができる状態を人間自身の内部に作りだせば、人間は聖霊の働きによって改善され、それにともなって人間の集りである教会も改善されることが可能になるというのである。以上が、第二部の概要である。

『敬虔ナル要望』第三部は標題ページでいうところの「純真に改善を目ざすキリスト教徒にふさわしい若干の提案」であって、内容的に六条から成る。第一条は「神の言葉を私たちのあいだにもっと豊かにひろめることに意を用いてほしい」(53)という要望であって、続けてこう言う。「私たちは生まれながらには善いものを何ひとつ身につけていない、私たちに何かがあるとすれば、それは神によって私たちのうちに作られるものにちがいないことを、私たちは知っている。それが作られるためには、神の言葉が力強い手段である。なぜならば信仰は福音によって点火されなくてはならないからである。(中略)私たちの間にみ言葉が豊かに住まうようになればなるほど、私たちはそれだけ多くの信仰とその果実とをみのらせることになろう」(53—54)。

神の言葉すなわち聖書は、「すべて神に吹きこまれて書かれたものであって、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導くのに有益である(二テモ三—十六)」(54)から、人間の改善のため最も有力な手段としてとりあげられるのである。シュペーナーは聖書をより多くより深く読むための具体的な方法として三つのことを提案する。その一は、「一家の主人はそれぞれ自分の聖書、少なくとも新約を手もとにもって、毎日それを少しづつ読み、もし自分が読むことに不馴れな場合は、ほかの者に読んでもらう」(54)こと、第二は、私的な聖書講読会へ人びとを促がし駆りたてること、そしてもし可能ならば、「公の衆会で一定の時間ごとに聖書の各巻が順々に注釈なしに朗読されること」(55)が願わしく、「その際それに短い要約を加えることが大切である。これはすべての人びとに、とりわけ本を読むことができなかったり、聖書を自分でもっていない人びとに、信仰心を起こさせるためである」(55)。第三の提案は『コリントの信徒への第一の手紙』十四—二六以下に書かれているような、昔の使徒たちが行なっていた教会集会のやり方を再び始めようというのである。この集会では、「一人だけが前へ出て教える(中略)のでなく、他の才能と認識を授かっているが、しかし混乱や口論におちいることのない者たちも加わって、いっしょに語り、そこに出された問題について自分たちの敬虔な考えを述べ、その他の者たちはそれについて判定を下すがいい。(中略)ときには牧師職

から二三人の者が、あるいは神からかなりの認識を授かっているか、あるいは認識をふやしたいと熱望している他の数人の衆会の者が牧師の指導のもとに、集まって、聖書を前において朗読し、それぞれの節について素朴に理解できたこと、またいろいろな点で私たちの信仰促進に役だつであろうことを、たがいに仲よく語りあう。問題を十分に理解できない者はだれでも、自分の疑問を提出してその解明を求めることが許され、また今はかなり進歩した人びとには、牧師たちとともに、自分がそれぞれの箇所で得た理解を述べることが許される。めいめいが述べたことは、それが聖書における聖なる霊の意向に合致しているかどうか、のこりの人びと、とりわけ召命された教師（＝牧師）たちによって吟味され、それによって集まった者全員の信仰が促進される」（55-56）。

このような提案が実行されたときの効用をシュペーナーは次のように算用する。「牧師たちのがわは自分たちの聴衆と知りあい、彼らの弱点や、あるいは敬虔の教えにおける成長を知ることによって、双方のために有益な信頼が築かれるだろう。また聴衆は神の言葉を熱心に勉強する機会をたくさんもち、必ずしもそのつど口にする勇気をもたない自分たちの疑問を牧師に慎しみ深く持ちだしてその解釈に耳を傾けるよう元気づけられ、そして短時日のうちに自分たち自身が成長するとともに、自分たちの家内教会で子供たちと奉公人たちをよりよく教育することができるようになるであろう。（後略）」（56）。

以上概観した聖書集会の趣旨は多くの点で、シュペーナーが創めた「敬虔ノ集会」のそれと合致していると見ることができよう。聖書をもっと豊かにひろめようという彼のこの提案がルターの聖書主義を継承するものであることは、彼がこの提案のあと次のようにルターに言及してその言葉を引用していることからも明らかである。

「私たちの亡きルターは、人びとに聖書を熱心に読むよう励ますこと以上に一生懸命に努めたことが、何かあっただろうか。人びとが聖書を読むのを怠らないよう、自分が書いた本を出版することをほとんど躊躇するほどであった。彼はこう言っている。『私は私の本がぜんぶ売れ残ったり取り残されたりしても、それを喜んで見ていたい、と思っ

たほどだ。その理由の主な一つは、私の本が先例となることを怖れたからだ。というのは、人びとが聖書を除外して、または聖書と並べて、たくさんの本や大きな蔵書を集め始めたことが、とりわけ見境いもなくあらゆる教父たちの本や公会議の議決書、教説書を集めたことが、教会にどんな利益をもたらしたか、よく分かるからである。そのような書物のために貴重な時間が空費され、聖書の研究がおろそかにされただけでなく、ついには神聖な言葉の純粋な認識までもが失なわれてしまったのだ。[・・・] 私たちが自分たちで聖書をドイツ語に翻訳し始めたとき、私たちが希望したことは、本を書くことが少なくなり、聖書を研究し読むことがますます多くなるようにという思いだった。また他のすべての本は聖書に拠って、聖書に則して教えるがいいという思いだった。公会議も教父たちもまた私たちも、たとえ最高かつ最善の結果を得ることができようとも、神自身がお作りになった聖書には及ばないのである。[・・・] 今私の本を得たいと思う人は、断じてそれが聖書そのものを研究する妨げにならないようにしてもらいたい[19]』」(57)。

第二の要望は、「霊的祭司制の確立と熱心な実践」(58)への提案である。霊的祭司制は万人祭司主義と同義であり、これもまたルターの宗教改革の理念の一つであった。シュペーナーはこう述べる。「私たちがしばしば名前をあげてきたルター博士であったならば、第一の方法と並べてそれとぴったり協和する第二の手段を提案するであろう。それは霊的祭司制の確立とその熱心な実践であり、それを今第二の手段としなくてはならない。ルターの著作を少しでも熱心に読んだ者は、この敬虔な人がどれほど真剣に、牧師に限らずすべてのキリスト教徒は自分たちの救い主によって祭司とされ、聖なる霊によって聖別され、そして霊的祭司の仕事を任されるという、霊的祭司制を推進したか、見てとったはずである」(58)。

シュペーナーはルターの論を承けてこう主張する。すなわち、教皇制においては、霊的・祭司的職務が僧侶階級のみに帰属し、他のキリスト教徒たちがそこから除外されていたのは、悪魔の特別な奸計によるのであり、主の言葉を

熱心に学ぶことは一般信徒にふさわしくないかのように思われている。ましてや、隣人を教え、戒め、罰し、慰めることや、聖職者が教会で公に行なうようになっていることを、私的に行なうのは一般教徒には許されず、それは専ら僧職に所属する業務とされていた。そのことによって平信徒たちは、自分たちが当然かかわるべきことを怠り、そこから怖るべき無知が生じ、その無知から混乱が生じた、というのである。

このような事態への対処としてシュペーナーはこう述べる。「すべてのキリスト教徒は霊的なもろもろの職務を遂行するよう召命されていることがルターによって示されたこと以上に、教皇制にとって手痛い打撃はありえなかった。すべてのキリスト教徒は霊的職務を行なう資格があるだけではなくて、これまでとは別のやり方でキリスト教徒であろうとするならば、そういう職務をひきうける義務がある。つまり、それぞれのキリスト教徒は、単に自分および自分の所有するものを、祈り、感謝、よきわざ、喜捨等々のために犠牲に献げるだけではなくて、主の言葉を熱心にまなび、他の人びと、特に自分の家の者を、自分に与えられた恩寵に応じて、教え、罰し、訓戒し、回心させ、その者たちの信仰を促進させ、生活を見守り、みなのために祈り、みなの至福のために力のかぎり世話を見る義務がある。このことがまず人びとに示されると、各人は自分自身にいっそう多く注意をむけ、自分と隣人の信仰を促進するにふさわしいことを心がけるようになるであろう」(59)。

このように平信徒のそれぞれが、これまで専ら牧師が扱ってきた職務を行なうようにという提案に対しては、それは牧師の職分を侵害することにならないか、という反論が予想されよう。このような懸念に対してシュペーナーは、平信徒たちは注意を払い、もし牧師が怠慢であったならば兄弟同士のように訓戒し、牧師を助けるべきであるという。この万人祭司主義の採用は決して牧師の職分を侵害するものでなく、むしろ指導者としての、最も老練な兄弟としての牧師の職務の遂行を助けることになる、というのである。「それゆえ、ルターの時代から後はもはや殆ど推進されたことのなかったこの案件を、人びとにもっとよく知らせる（中略）ことを考え続けるだけでなく、どうしたならば

これをよりよく実行に移すことができるか、思案すべきであろう。そのためには、先刻提案した聖書の講読と理解を進める手ほどきもまた少なからず役だつであろう。それぞれの衆会で何人かの者がこの二つのこと、つまり神の言葉の勤勉な学習と祭司としての義務の遂行とに、他の事柄、とりわけ兄弟同士のような訓戒と懲罰（中略）にと同じように熱心にとりくみさえしたならば、大きな仕事がなされ、大きな成果が得られ、その後にはますます多くの物事とますます多くの人びとが獲得されて、ついには教会が目に見えて改善されるであろうことを、少なくとも私としては堅く確信している」(60)。

第三の提案は、「キリスト教を知っているというだけでは決して十分ではない、それ以上にキリスト教の本質は実践にあるということを、人びとに銘記させ、それを信じるよう早く習熟させること」(60—61)である。キリスト教の本質は知識でなくて実践にあるという命題は、すでに本稿の始めの部分でシュペーナーのキリスト教観の基本として紹介した。そこで問題は、何を実践すべきかということである。この点についてシュペーナーは明快に、それは愛の実践であるという。「私たちの愛する救い主が私たちに、ご自身の弟子であることの真の目印として愛［の実践］をお命じになったことを、特に心に銘記させる必要がある（ヨハ十三—三四・三五、十五—十二、一ヨハ三—十・十八、四—七・八・十一・十二・十三・二一）。それゆえ、親愛なるヨハネもまた（中略）老齢になってからは弟子たちにむかって、『子供たちよ、たがいに愛しあいなさい』という以外には殆ど何も話さないのが常であった。弟子たちや聴衆はいつも同じことを聞かされるのにうんざりして、なぜいつもひとつことばかりおっしゃるのか、と尋ねたところ、それは主の命令だからである、それが実行されれば十分である、という返事をもらったという。信仰をもち信仰によって至福を得た人間のすべてと、神の命令の実行とは、愛のうちに存する」(61)。

キリスト教徒の生活における愛の重要性をルターが『キリスト教徒の自由について』で強調していることは、周知

のとおりである。アルント『真のキリスト教』もまた愛について熱烈にまた詳細に語る。たとえば第一巻十八章では、「愛は人間の心のすべてであり、そして最も高貴な情動である。それゆえ愛は最貴最高の善としての神にのみ献げられるのが至当である」と言い、二四章では「愛のみがキリスト教徒の真の証しである」、「神への愛と隣人への愛はひとつものであるから、分けられてはならない」と述べ、以下二五章「隣人への愛について」から三十章「愛のもろもろの果実について」まで、愛についてさまざまな角度から説いている。

さて、シュペーナーは愛の実践を具体的に次のように説く。「もし私たちが私たちキリスト教徒の間で熱烈な愛を、まずお互いに、次いですべての人間に対して目覚めさせ(この兄弟愛と万人愛の二つは重なりあわなくてはならない。二ペト一―七)、それを実践に移すことができるならば、私たちが要望することは殆どすべて達成される。というのも、神のすべての掟は愛に尽きるからである(ロマ十三―七)。それゆえ人びとにこのことを熱心に語るだけではいけない。隣人愛のすばらしさと、その逆にそれに対立する自己愛の大きな危険と害悪を人びとにはっきり見せてやる(この問題は特にあの才智ゆたかなヨーハン・アルントの『真のキリスト教』第四巻二部二二章以下でみごとに語られている)だけではなくて、人びとにそういう隣人愛を実行させなければならない」(61)。ちなみに、『真のキリスト教』第四巻二部二二章は「私たちが神に献げなくてはならない第一の愛からもう一つの人間への愛が生まれること」という小標題をもち、二四章は「一人一人の人間は他の一人一人の人間を自分自身と同じように愛する義務があること、そしてその愛はその人間にとって自分自身の最善の宝となること」という。

第四の要望は「宗教論争」(62)の抑制である。ここでシュペーナーは、信仰をもたない者(不信仰者)や誤った信仰をもつ者(異端者)をどのような論議によって真理の光へ導くべきかの問題を論じるのであるが、それに先立ってまずこう述べる。「私たちはまず私たち自身と家族の者たち、およびその他の信仰の兄弟たちを、認識された真理に

おいて強め、力づけ、そしてあらゆる誘惑から細心の注意を払って守るよう努めなければならない。しかしその次には迷っている者たちに対する私たちの義務の履行に励まなければならない」(62)。

この発言は、論敵を自分の陣営に取りこもうとして逆に相手方に引きいれられる危険もある宗教論争の怖ろしさを知る者のみずからに対する警戒警報であろう。シュペーナーは相手を取りこむための手順を次のように示す。「そのような人びと(不信仰者と異端者)に対する責務は、まず第一に熱心にこう祈ることである、慈悲深い神が、私たちにお恵みくださったと同じ光でもって、彼らをも同じように照明なされて、彼らを純粋な真理に導き、彼らの心にそのための準備をさせたもうように、と。(後略)」(62)。

二番目には、自分たちは彼らにとってよい手本となり、彼らを決して怒らせないよう細心の注意を払わなければならない。さもないと自分たちの正しい教えがよこしまであるかのような印象を与え、彼らの回心を難かしくするからである、という。

第三は、「私たちが信じる真理を慎みぶかく、かつ力強く紹介することによって、彼らにその真理がキリストの教えの素朴そのものに根ざすことを示し、そのあと彼らの誤謬をはっきりと、また穏かに反証することによって、それらの誤謬が神の言葉にどのように悖るものであって、どんな危険を惹きおこすかを明確に教えてやらなくてはならない」(62—63)、というのである。その際大事なのは、それら論議はすべて相手に対する心からの愛に発するものであって、かりにも肉の情熱が混りこんではならない、ということである。

四番目には、「不信仰者や迷える者たちに対する心からなる愛の実践」(63)である。私たちは不信仰や異端の蔓延に対して懸命に反対するが、しかしその他の人間生活に属する事柄では彼らの隣人であるのみならず、兄弟でもあるということを示してやらなくてはならない、というのである。

五番目の提言は、手順を示すというよりも、論争重視の傾向に反対する提言である。シュペーナーはまずこう言う。

「キリスト教徒たちの間に存在する諸宗派の最多数を統合することについて、私たちが若干の希望をもてるとするならば、恐らくその最短の、そして神から祝福される道は、私たちがすべてをひたすら論争にかけるようなことをやめることである。今や肉的にも霊的にも熱意にみたされた人びとの心の状態が、論争を不毛にするからである」（63―64）。この発言は、敬虔主義が目ざしたキリスト教諸宗派再一致の運動に関連づけて考えられるが、しかしここで教会統合を訴えることが、シュペーナーの主目的ではない。彼の関心は過度の、不毛な論争の排除に向けられている。彼はアルントの次の言葉を引用する。「教説と神の言葉の純粋性は論争と多くの書物によってだけではなく、真の悔い改めと聖なる生活によっても保たれる」（64）。これは『真のキリスト教』第一巻三九章の標題である。この引用だけを見ると、「論争と多くの書物」と「悔い改めと聖なる生活」は同じ重みをもつように見えるが、しかしシュペーナーが後者に力点を置いていることは、この引用に続いて同じ『真のキリスト教』の第一巻三七章と三八章の標題を引いていることからも明らかである。すなわち、「信仰と聖なる生活と不断の悔い改めにおいてキリストに従わない者は、自らの心の盲目から救われえないで、永劫の闇の中にとどまらなくてはならない。またキリストを正しく認識することもキリストと交わり与することもできない（三七章）」（64）、また「キリスト教徒にふさわしくない生活は、いつわりの、誘惑的な教えのひとつの原因で、人を強情にし、眩惑する（三八章）」（64）。

シュペーナーはまたルターの発言も引用する。「真理はたくさん論争することで失われるのであって、教説によってではない。というのも、論争は人びとの心を腐敗させる害悪を伴なうからである。人びとは口論に熱中するあまり、自分たちが何よりも先にしなくてはならないこと、何よりも大事なことを、ゆるがせにしてしまうのである」[20]（64）。宗教論争についてシュペーナーが訴えようとしていることは、およそ次のようなものである。論争しすぎは有害である。なぜならば、それによって真理そのものが失なわれるからである。正しい論争といえども、それは真理を保持する唯一の手段ではなくて、他の方法も必要である。真理を理知的に確信するだけではまだ決して信仰とは言えない。

信仰にはそれ以上のことが必要である。真理を主張し真理を伝達するためには、論争だけでは不十分であって、神にたいする敬虔な愛こそが必要なのである。

『敬虔ナル要望』の第五の提案は学校と大学における牧師の養成に関するものである。ルターの『ドイツ国民のキリスト教貴族に与える』が、大学と学校の改善を提案して、聖書の研究と教育を重視するよう訴えていることは、周知のとおりである。シュペーナーは、自分がこれまで提案してきた教会改革の諸方策を、だれよりも先に全力をあげて実行しなければならないのは、牧師の職にある者たちであるから、「何よりもまず自分自身が真のキリスト教徒であって、さらに他の人びとをも主の道へ注意深く導いていく神意にかなう知恵をもつ者たち」(67)をその職に得ることが重要であると考える。そのような牧師への適任者を養成する場所である学校と大学が、やはり憂うべき状態にあることを指摘して、シュペーナーはそれが力強い手段によって取りのぞかれ改善されるよう、教授たちに配慮と助力を要請するのである。彼はこう述べる。「当然あるべき大学はすべての身分において教会の苗圃園として、また聖霊の仕事場として認識されることが望ましく、学生たちの外的生活から見て、世俗精神の仕事場や、まして名誉欲、飲んだくれ、撲りあい、口げんかの場所であってはならない」(68)。

教授たちには、学生の模範となることが要請される。彼らは、「俗世に対して死んだものとなって、何ごとにおいても自分自身の名誉や利益やあるいは悦楽を求めず、すべてにおいてひたすら自分たちの神の栄誉と自分たちに委ねられた者の救いのみを求め、そしてこの目的に即して自分たちの研究や著作、読書、講義、討論その他の業務を行なうならば、模範として多くのことをなしうる」(68)。俗世に対して死んだものとなるということは、つまりは古い外なる人間から新しい内なる人間に生まれ変って初めて可能になることであろう。

さらに教授たちは学生に、「敬虔な生活が勤勉と学習に劣らず重要であること、いや、敬虔な生活がなくては、勤

勉と学習は何の価値もない」(68)ことを肝に銘じさせなくてはならない。「神学は実践的態度である」(69)がゆえに、すべては信仰と生活との実践に向けられなくてはならない。この原則を植えつけられた神学部学生は、すでに最初の二三年のうちに俗世に対して死んだものとなって、そしてやがては信者たちの群の手本となる者にふさわしい生活を送らなくてはならない、ということのみを思うようになるであろう、というのである。

教授が学生に接する姿勢について、シュペーナーはこう述べる。「教授諸氏が自分たちに委ねられた学生たちの生活に対して修学に対すると同様の注意をはらって、語りかけてやることが必要な学生にはしばしば語りかけてやることが、特に有益であろう。また、りっぱに修学するが、りっぱに放蕩もして、大酒をくらい、大言壮語し、修学その他において自分の功名心をあらわにし、そして要するに、自分はキリストにならってではなくて世にならって生活していることを示している学生に対して、教授諸氏は、彼らが先生たちから軽蔑されており、彼らのりっぱな素質とすぐれた学問も何の役にも立たない、彼らが享けた才能が多ければ多いほど、将来彼らはいっそう大きな害をなすようになる者たちと見なされるということを、彼ら自身が悟らざるをえないような態度をとることが有益である。他方、学問では右の学生たちに劣っていても真に敬虔な生活を送っている学生には教授諸氏は、彼らが右の学生たちよりも自分たちには好ましいのだということ、彼らの方がずっと優先されるということを、公の場でもまた個別にも示してやることが適切である」(71—72)。このような対学生姿勢は一見教育的に適正であるように見えるが、しかしある重要な問題を含んでいよう。というのも、このような態度は偽善ないし偽似信仰を誘う可能性を否定できないからである。右の引用につづいてシュペーナーは、「いや、昇進に際してはいつもこのような学生が他の学生に優先される、というか、あるいは、むしろこのような学生のみが優先されて、他の学生たちは、生活ぶりを完全に改めるまでは、あらゆる昇進の希望から締め出されるべきであろう」(72)と述べるが、ことが昇進にかかわるとなると、もともと敬虔でない学生が敬虔を偽装することも十分にありうる。この場合それを見破ることは決して容易なわざではあるまい。

その点について、謹厳家シュペーナーがどこまで理解していたか不明であるが、彼の次の提案はかなり問題を含んでいると言わざるをえない。「もしすべての学生が能力と勤勉についてのみならず、敬虔な生活についてもそれぞれの大学から証明書をもらって卒業していかなくてはならないようになれば、それも悪くはないであろう。このような証明書は慎重に交付されるべきで、それに相応しない者には決して与えられてはならない」(72)。だれが相応しだれが相応しないかの決定は、神のみに可能なことであるまいか。

次にシュペーナーが教授たちに要望するのは、真理を擁護することができるよう論争にも熟練した少数の学生を養成することであり、さらにその際、論争が当時一般的であったラテン語によるだけではなくて、ドイツ語でも行なわれることが望ましい、という。そのわけは、彼らが将来牧師として説教壇に立って何かある論争に言及してその内容を一般の教区民に話さなくてはならない場合に、それをドイツ語で語ることができなくては職務不適格だからである。

論争に熟練した学生の養成を要望する一方でシュペーナーはまたここでも、論争そのものを抑制し、不要な議論を切りすてるよう注意を促がし、さらに「神学全体がふたたび使徒時代の素朴に立ち戻るがいい」(74)と付け加える。抑制し素朴に立ち戻る、これが神学全般に対するシュペーナーの取り組みの基本と見ることができよう。彼はまた、教授たちが学生に推奨するのに適当な書物として、「素朴な小冊子『ドイツ神学』[21]とタウラー[22]の著作集」(74)を挙げ、ルターは聖書の次にこれらの本をかてにしてあのような人になったと述べ、さらにトマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』[23]を付け加える。

この第五の提案でシュペーナーはすでに見たように、「神学は実践的態度である」と言ったが、同じ言葉をもう一度くりかえして次のように述べる。「神学は実践的態度であって、単なる学識の事柄ではなく、単なる学習では不充分であり、他方ではまた利益を引きだしたり講義したりすることだけでも不充分であるという理由から、実践と自分自身の信仰促進に必要な事柄に心情が慣れしたしみ、それに習熟するようなあらゆる種類の訓練が行なわれることが

考慮されるべきであろう」(76)。そしてさらに続けて彼が述べる改革への要望は、次第に細心綿密の度をくわえる。いわく、「それゆえ、若干の講義では、特に私たちの愛する救世主とその使徒たちの言動を観察して生活規律を書き出して、そのなかからもろもろの問題をとりあげて熱心に研究し、それを学生たちに銘記させるだけではなくて、彼らがどのようにして敬虔な考察を行なったらいいのか、どのように自分自身を検証して自己をよりよく認識すべきか、肉の欲求にどのように抵抗すべきか、欲望をどのように抑えて、世に対して死んだものとなるべきか、ということをも教えることが望ましい」(76)。そして個々の具体的な方法として、「敬虔な神学者が初め自分の学生たちのなかで、すでに誠実なキリスト教徒になりたいという心からの欲求をもっていると認めたあまり多数でない者たちといっしょに、この仕事を始めて、彼らとともに新約聖書を主に扱い、彼らが学識に属するような事柄を求めないで、彼らの信仰促進に役だつことにのみ注意を払うようにする」(77)ことが有益であるとし、またその聖書の取り扱いに際しては、「学生たち自身、それぞれがそれぞれの小節について思うことを、そのつど語ることを許され、そしてその小節を自分と他の人びとのためにどのようにして応用することができるか、思うところを述べる」(77)ことが望ましく、他方で、「教授は指導者として、学生たちの正しい観察をさらに裏づけてやり、もし彼らが正しい目標から逸れていると見たならば、それを聖書本文に基づいて親切にはっきりと示してやり、そしてこれを機会にあれこれの規則を実行に移すことを教えてやるがいい」(77)というのである。さらにまた、学生相互間の訓戒、信頼と友情等が要望されるが、その詳細はここでは省略する。

さて、シュペーナーはこの第五の提案の最後に教授と学生の身分関係について次のように述べる。「教授はより多くの経験をつんだ者として、自分がそれぞれの状況に対してどう考えるかを、私たちの唯一の師(=キリスト)の言葉に基づいて学生たちに説明してやることよりほかに、自分を信頼する者たちの良心を支配する何らかの手腕をもっているなどと思いあがらないでほしい。そして学生たち自身が経験をつむにつれて、彼らと同僚としてあらゆること

について協議するがいい。このようなことがある期間、心から熱烈に神に呼びかけつつ続けられるならば、また特にめいめいの者が主として聖餐式の準備をしようと思うとき、自分の良心の状態を講座の全員の前で報告して、その助言に常に従うならば、短時日のうちに敬虔のすばらしい前進がなされることを私は疑わない。このことが正しく始められたならば、ますます多くの者たちがそこへ引き寄せられるという効果が生まれ、ついには彼らは牧師職につくまえにすでに誠実なキリスト教徒となる人びととなることができるであろう。その人びとが他の人びとをそういう誠実なキリスト教徒にするようになると、彼らは教えることよりも実行することに懸命になるであろう」(78)。以上が第五の提案の概略である。

第六の、そして最後の提案は「信仰促進のための説教を構想する」(78)ことの要望である。シュペーナーはこう述べる。「説教もまたその目的、すなわち信仰とその果実が聴衆たちのもとで可能なかぎり促進されるよう、すべての説教者によって構想されるならば、それはキリスト教会をよりよい状態にもたらす助けとなるであろう」(78—79)、というのである。現在行なわれている説教に彼が見出す欠点は、次のようなことである。「聴衆が理解しないにもかかわらず、しばしば説教の大部分を、自分が学者であるかのように見せかけるたぐいの事柄で費してしまう牧師たちがいる。彼らは教会のなかで恐らく一人として一語として知る者がないのに、しばしばたくさんの外国語を引っぱってこないではいられない。何と多くの牧師たちは、前口上がうまく出来、組立てがきれいに行くことや、構成が巧妙で、継ぎめが十分に隠され、すべての部分を修辞法に合致させ、飾りたてることばかりに気をつかって、聴衆の生活において、また死に際して、役だつような題材をどのように選ぶべきか、またそれを神のお恵みによってどのように語るか、ということに心を砕かない。こういうことではいけない。説教壇は技量や華麗を誇示する場所ではなくて、主のことばを素朴に、だがしかし力強く説く場所であり、主の言葉が人びとを救う神聖な手段でなくてはならないの

であるから、すべてはこの目的にあわせて行なわれなくてはならない。その際、聴衆は牧師に気をくばることができないから、牧師が聴衆に合わせるべきであろう。牧師はその際いつも、少数の学識者がそこにいたとしても、その人たちよりも、大部分をしめる素朴な人びとに気をくばるべきである」(79)。

また牧師は教理問答書のなかから、人びとが以前に学んだ事柄をくり返し説教にとりいれて話すがいい、なぜならば教理問答書はキリスト教の最初歩の基礎を含んでいて、人はみな信仰を教理問答書から学んだのだから、という。

シュペーナーが説教に関して一番大切と考えるのは、説教が内なる人間あるいは新しい人間を目ざして行なわれることである。内なる人間、新しい人間がキリスト教の本質にかかわる彼の把握であることは、すでに本稿の始めで見たとおりであるが、今ここで再び引用すると、「私たちのキリスト教のすべては内なる人間あるいは新しい人間において存立し、その人間の魂は信仰であり、そしてその信仰のもろもろの成果が生活のもろもろの果実であるのだから、説教はすべてそういう内なる人間あるいは新しい人間を目ざして行なわれなければならない」(79)、といい、さらに続けて次のように述べる。「一方ではたしかに、神の貴い恩恵は内なる人間に向けられているのだから、信仰とその信仰において内なる人間とがますます強められるように、説き聞かせられなくてはならないが、しかし他方では、わざは、私たちが人びとに外的な悪徳の中止と外的な美徳の実践とを促すことでのみ、つまりは外なる人間にのみかかわりあうこと――そんなことは異教徒の倫理でもできるだろう――で満足することがないようなやり方で、勧められるべきである。私たちは人びとの心のなかに正しい基礎を置いてやり、この基礎から出発しないものごとは偽善であることを示し、それゆえ人びとに、まずそのような内なるものに従事して、神への愛と隣人への愛を自分のうちにしかるべき手段によって目覚めさせ、しかるのちこの基礎にもとづいて働くという習慣をつけさせるがいい」(79―80)。

シュペーナーはこのように内なる人間、新しい人間を目ざす、真の信仰促進に役だつ説教を求めたあと、そういう

説教のすばらしい模範がヨーハン・アルントの『説教集』に見出され、そして自分が今書いているのは、この『説教集』への「序文」であることを明かすのである。この「序文」がのちに『説教集』から切り離されて、『敬虔ナル要望』として刊行されたことは、すでに見たとおりである。

第二節　再生論

前稿[24]で筆者は、敬虔主義の根本的な志向は若いルターの精神に立ちかえって、堕落した教会を改革し、初期キリスト教時代のような純粋清新な信仰を現代に復活させようというものである、と書いた。ルターの宗教改革の三大理念として聖書主義、万人祭司主義および義認論があげられるが、シュペーナーの『敬虔ナル要望』が第三部で聖書主義を、「神の言葉を私たちのあいだにもっと豊かにひろめる」ための提案としてほぼそのまま継承し、同様に万人祭司主義を「霊的祭司制の確立と熱心な実践」として復活しようとしたことは、すでに見たとおりである。義認論すなわち「信仰による義」Glaubensgerechtigkeit の教えは、ルター神学の根幹をなすものであるが、これについての『敬虔ナル要望』の取り扱いは右の二者とはかなり違っている。すでに見たように、「福音主義教会の堕落した状態への概観」を行なう第一部でシュペーナーは、「私たちが唯ひとつ信仰によってのみ救われなくてはならないということ、そして、わざあるいは敬虔な行状は救済のために多少なりとも役立つものではなくて、信仰の果実としてのみ、私たちが神に献げなければならない感謝の一部となるものである、なぜなら神は私たちの信仰に義と救いをお恵みくださったのだから、ということを、私たちは喜んで承認したい」(32)、と述べているが、この発言は義認論のまさに承認ではあっても、積極的な普及や推進ではない。むしろ、この発言の力点が、「わざあるいは敬虔な行状」という外見だけの行為が救済に役立つものでない、という点にあることは、右の引用につづく記述から明らかである。とりわけ、

その論拠の一つとして彼はルターの『ローマの信徒への手紙の序言』の中から、本稿でもすでに紹介した（62・63ページ）、「信仰とは、ある人びとが、これが信仰だ、と考えているような、人間の妄想や夢想ではない、云々」の言葉を引用している。同じ『序言』の中でルターは右の言葉の少し前に、「このことからして、信仰のみが義とし、そして掟を履行するということが明らかになる」[25]（傍点は筆者）、と述べているが、「信仰のみが義とする」という義認論のもっとも直明な定義を含むこの部分を『敬虔ナル要望』は引用しない。それはルター派教徒であるシュペーナーにとってこの命題があまりに自明なことわりであったためであろうか、いずれにせよ、彼のより大きな関心は、「信仰とは・・・人間の妄想や夢想ではない、云々」の言葉に向けられている。ルターのこの言葉で筆者が最も注意をひかれるのは、後半部の、「信仰は私たちの内部で行なわれる神のわざであって、それは私たちを変化させ、私たちを新しく神から生まれさせ（ヨハ一―十三）、そして古いアダムを殺して、私たちを心も、気持も、想念も、すべての力も、まったく別の人間にし、そしてかならず聖なるみ霊を伴ってくる」（傍点は筆者）、という叙述である。『ヨハネによる福音書』一―十三はルター訳によれば、「この人びとは血によってではなく、肉の意志によってでもなく、まただれかある一人の男の意志によってでもなく、神によって生まれたのである」[26]と書かれている。「神によって（von Gott）生まれ」を、「新しく神から（aus Gott）生まれ」と解釈したのはルター自身であり、シュペーナーはそれを踏襲したにすぎない。「新しく生まれる」、すなわち「新生」は、「再生」と同義語であり、それは古い人間（アダム）が死んで、新しい人間に「生まれ変る」ことを意味する。

すでに見たように、『敬虔ナル要望』第三部で著者は、「私たちのキリスト教のすべては内なる人間あるいは新しい人間において存立し、その人間の魂は信仰であり、そしてその信仰のもろもろの成果が生活のもろもろの果実である」（79）、と述べた。「内なる人間」あるいは「新しい人間」はまた「霊的な人間」とも呼ばれ、その反対は「外なる人間」あるいは「古い人間」、「肉的な人間」である。ルターの『キリスト教徒の自由について』第二節には次のよ

うに書かれている。「キリスト教徒はだれでも霊と肉という二つの性質をもっている。魂から見れば人間は霊的な、新しい、内なる人間と呼ばれ、肉からすれば肉的な、古い、外なる人間と呼ばれる」[27]。アルントも『真のキリスト教』において、新しい人間、内なる人間にしばしば言及している。たとえば第一巻十五章では最初の節で『エフェソの信徒への手紙』から、「だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人間を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人間を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」（エフェ四―二二・二三・二四）という句を引いたあと、第二節でこう述べる。「しかし古い人間は不遜、貪欲、肉の情欲、不正、憤怒、敵意、憎悪、嫉妬等々以外の何物でもない。これらのものは、真のキリスト教徒において新しい人間が現出して日々新たにされるためには、すべて死ななければならない」。さらに第三節、「さて、この古い人間が死ぬと、それに代って新しい人間が生き始める。つまり、不遜があなたのうちに死んで、代って謙虚が神の霊によって呼びさまされる。（中略）世の愛があなたのうちに死んで、代って神の愛が打ちたてられる。これがすなわち肢体をもった新しい内なる人間である（後略）」。

「新しい人間」は「新しい誕生」のうちに生きる。『真のキリスト教』第一巻十六章三節にはこうある。「ところで霊が勝てば、その人間はキリストにおいて、そして神において生き、そして霊的と呼ばれ、そして新しい誕生のうちに生きる。しかし肉が勝てば、その人間は悪魔において、古い誕生のうちに生きる」。新しい誕生とは「新生」であり、新生はまた「再生」と同義である。

『敬虔ナル要望』は再生の問題を主題としては取りあげない。また「再生」ないし「新生」という語もほんの数箇所で使われているにすぎない。たとえばすでに見たように、僧侶階級の欠陥を指摘する節で、「[僧侶たちが]何事においても再生の真のしるしを実際にはもっていないのではないか」（17）、と疑念を表明し、同じ関連でさらに、「彼らが愛情ゆたかな、再生した神の子たちであった、と推測することはできない」（18）と述べたり、また行為の外面的

遂行を批判する節で、「私は、洗礼とは『聖霊による再生と改新の真の水浴』（テト三―五）であると信じている」(33)、と述べる箇所が目につく程度である。ということは、しかしシュペーナーが再生の問題をないがしろにしているという意味ではない。いや、むしろ、「再生」がいわば底流として『敬虔ナル要望』全体を貫いている、と言うことができよう。なぜならば、教会改革は単なる機構や制度の改革ではなくて、教会構成員ひとりひとりが古い人間から新しい人間に再生することによって初めて可能になるのであり、そして『敬虔ナル要望』はまさに新しい人間へ向けて再生の道筋を示すものだからである。

筆者の読むことができた再生に関するシュペーナーの論説は一六七七年出版の問答形式による『キリストの教えの素朴な解説』[28]に収められた十数節、一六八九年の『簡約教理説教集』中の『テトスへの手紙第三章五・六・七節に基づく再生についての説教』[29]（以下、『テトス説教』と略記する）のほか、『聖霊第一論集』[30]（一六九九年）および『再生についてのきわめて重要な論説』[31]（一七〇一年）のそれぞれからの抜粋数篇にすぎないが、彼の再生についての考え方の大筋は把握しえたと思う。ここでは『テトス説教』を中心に他の論説をも適宜参照しつつ彼の再生論を探ってみることにする。

まず、再生の問題がキリスト教全体のうちに占める重要度について、『再生に関するきわめて重要な論説』中の『再生の不可欠性について』と題される説教に次の発言が見られる。「私たちのキリスト教について何かある問題が肝要であるとするならば、きっとそれは再生の問題、つまり私たちの回心と義認とそして私たちの聖化の始まりがともに流れこむところのものとしての再生の問題であろう。そしてそれは他のすべての聖化の基礎である、というか、あるいは私たちの全生活において、私たちによってかあるいは私たちのうえにあるかまたは行なわれる善のすべてが、必然的に流れでるところの源泉でもある。従って、私たちのなかでこの源泉を正しく理解する者は、きっとまた自分

自身のキリスト教の全体を正しく理解するであろう」[32]。表現が回りくどいが、要するに再生はキリスト教徒たる者の生活の聖化の基礎であり、いっさいの善の源泉であるというのである。

さて、『テトス説教』があげる聖書のその箇所はこうである。「神は私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自身の慈悲心から、聖霊による再生と改新の真の水浴によって、私たちを救ってくださった。神はその聖霊を私たちのうえに私たちの救い主イエス・キリストによって豊かに注いでくださったのである。それは私たちがイエスの恵みによって義となり、希望どおりに永遠の生命の相続人となるためである」。いま漢語調で「改新」と訳したドイツ語は Erneuerung であり、「新たにすること」の意味である。

『テトス説教』はこう始まる。「私たちは前回、テトスへの手紙第三章の美しく教訓ゆたかな章句をいっしょに観察しはじめて、その中で見たことは次のとおりであった。一、私たちの救いのすべては誰に由来するのか、つまり、それは神と聖なる三位一体であるが、しかしとりわけ聖霊が示現されていて、聖霊が私たちのうえに豊かに注がれているということ。二、私たちはどのような功徳によって救いを得るのか、つまり、私たちは私たちのわざによっては救いに役だつことを何も手にいれることができず、すべてはキリストが手にいれてくださるということ。三、救いは何をとおして私たちのもとへやってくるのか、つまり、それは聖なる洗礼と、その洗礼において水とともにある神の言葉であるということ。四、私たちはこの聖なる洗礼からどのような利益を得るのか、つまり、それは全部合わせて救いであって、その救いの本質は私たちが神の前で義であり、永遠の生命の相続人であるという点にあること。以上のことを私たちはこの前見たが、洗礼が聖霊による再生と改新の真の水浴と呼ばれるときの、この簡単に要約することのできない言葉をまだそのまま残しておいた。この言葉は恐らく特別の考察にあたいするものであり、そして、しばしば再生について聞いたり話したりする私たちキリスト教徒は、再生したキリスト教徒であろうと願い、またもともと再生とは何であるか理解したいと思うのが当然であるから、今回はこの再生の問題を取り扱いたいと思う」[33]。

こう述べてシュペーナーは「神学全体のなかで最も重要な問題の一つ」[34]であるこの再生の問題を次の六つの面から簡潔平明に解説しようというのである。一、再生と改新の違い。二、私たちは誰によって再生するのか。三、再生の手段。四、再生の本質は何か。五、再生がふたたび失われることがあるが、それはどうしてか。六、再生の目印。

第一項の再生と改新の違いの説明は次のとおりである。「洗礼について、洗礼は聖霊による再生と改新の水浴である、と書かれているから、再生と改新の間にどんな違いがあるのか、問われて当然である。そこで私たちはきわめて素朴にこう言うことができよう。すなわち、再生とは私たちが、もしそれ以前に神の子でなかった場合、初めて神の子となり、従って初めて霊的生命を受けるところの恩恵であるが、しかし改新は霊的生命を強化し、その人間をますます浄化する。それゆえ、再生は一挙に行なわれ、そして再生した者はまったく再生したのである。というのは、つまり、再生した者は完全に神の子となり、そして一挙に義になり、そして新しい本性を受けたのであるが、しかし改新はゆっくりと次第次第に行なわれる。それゆえ、再生はただちにそれ自体で完成しているが、しかし改新は未完成であり、私たちがこの世にある間は、まず一日一日と生長していかなければならない（今生まれたばかりの乳飲み子はまじりけのない乳によって生長しなければならない。一ペト二―二）。しかし改新は、罪ある肉が今やまったく脱ぎ捨てられた日に初めて完成する。だから教理問答書に次のように書かれているのは、改新にあてはまることである。『浸水洗礼の意味は、私たちのなかにいる古いアダムには日々の悔い改めによって溺れて、すべての欲望といっしょに死んでもらい、そして新しい人間が毎日毎日再び現われて復活し、神のまえに義と浄のうちに永遠に生きるように、ということである』[35][36]」。

第二項はこうである。「私たちは誰によって再び生まれるのか、と問われるならば、その答えは、私たちは神によって再び生まれる、である。神は私たちの父であり、再生によって私たちの父になるのである。私たちは神から生まれる（一ヨハ五―四）。しかも聖なる三位一体のぜんぶから生まれるのである。キリストの父が私たちを再び生むの

だから、私たちはその父の子であって、キリストの兄弟にもなるのである。それゆえその父は、天国と地上で子と呼ばれる者たちすべての父と呼ばれるのである（エフェ三―十五、ヤコ一―十七・十八）。私たちが造られた者たちの長子となるように、光の父が私たちを思しめしのままに真理の言葉によって生んで下さったのである。父は、私たちが子の身分を受けられるよう、その息子を遣わされた。また同じ目的で父はその息子の霊を私たちの心の中へ送ってくださった。その霊によって私たちは、『アッバ、父よ』と叫ぶ（ガラ四―四・五・六）。キリストはしかし、私たちの兄弟でもあるが、また私たちの父である。キリストもまた私たちを生むのである。キリストは、神の子となる力を与え（ヨハ一―二）、それゆえにまた永遠なる父と呼ばれる（イザ九―六）。（中略）キリストはもう一人のアダムと呼ばれ、いうなれば、天国の一族の新しい先祖であるが、そのわけは私たちが、肉の誕生によってアダムの子であるように、再生によってキリストの子になるからである（ロマ五―十七、一コリ十五―二一・四七）。つまり私たちは、いうなれば罪の誕生という点ですべての者の父であるアダムの一族の中から再生によって引きぬかれて、そして霊の生まれにおいてすべての者の父であるキリストの一族に移されるのである。もっと正確にいうと、そのような再生の力はとりわけ［キリストの］復活に帰せられる（一ペト一―三）。聖霊もまた私たちを再び生むものである。そのゆえにここで、聖霊による再生と改新の水浴、と言われるのである。そして私たちは水と霊によって再生されたのであり、そして霊から生まれたものは霊なのである（ヨハ三―［五・］六）。このように私たちを再び生むのは聖なる三位一体の全部である。（後略）[37]」。

第三項の再生の手段は、二つある。一つはすでに見たように洗礼であり、もう一つは神の言葉である。ここでは後者について詳しく語られている。「私たちは朽ちる種からではなくて朽ちない種から、つまり神の永遠に変わることのない生きた言葉から生まれた（一ペト一―二三）。神は思しめしのままに真理の言葉によって私たちを生んでくださった（ヤコ一―十八）。従って、古い人間が［真理の言葉によって］回心するならば、その人はまだ洗礼を受け

ないうちに信仰を与えられ、それによって再生するのである。従ってまた、すでに洗礼を受けた人間が、優勢な罪によって再生を失なってしまったあと、もう一度新しく回心して再生しなければならないとき、それは神の言葉によって行なわれるが、しかし洗礼がもう一度なされなければならないということはない。いや、洗礼それ自体においても、水を洗礼「の力」と再生の聖なる手段とに変えるのは、神の言葉なのである。水自体がそういうことをするのではないことは言うまでもない。それをするのは、水とともに水のもとにある神の言葉と、水においてそのような神の言葉を信頼する信仰とである。このように、もともと神の言葉は、そこから私たちが再生しなければならないところの種である。そういう神の言葉は、ひとつには洗礼により洗礼のうちにあって、それは説教を聞いたり、その他の手段を用いたりすることがまだできない小さな乳飲み子たちにおいて再生を成就し、（中略）また以前に説教に基づいて信仰をつかみ、従って再生した人びとにおいては、その再生を封印するのである。またひとつには、神の言葉は説教のうちにあり、また説教で聞かれ、聖書から読まれ観察される。（中略）しかし私たちのがわで再生を受けいれ、従って再生の手段となるのは、唯ひとつ信仰のみである（ヨハ一―二二、その名を信じる人びと）[38]」。この解説中、キリスト教徒でない筆者にとって理解がむつかしいのは、神の言葉がまだそれを理解できないような乳幼児をも再生させるという点であるが、今はこの問題に立ちいることなく先に進みたい。

第四項は、再生とは実質的にどんな事柄なのかという問題の解説であるが、シュペーナーはそれを三つあげる。第一は、「悔い改めようとしている人間の内部における信仰の点火[39]」であって、「その点火のあとすぐに信仰の火花が魂の中へはいりこみ、それが霊的生活の始まりである。その人間が真の信仰を得るやいなや、その瞬間彼はイエス・キリストの義を捉え、その義のおかげで義認され、神の子として迎えいれられる[40]」、というのである。義認がルター神学の根幹であることはすでに述べたが、シュペーナーはここで義認を再生の一構成要素として把えていることに注目しなければならない。

次に、「再生における第二の事柄は、私たちは私たちに贈られるキリストの義と功徳のおかげで恩寵によって神の子として迎えいれられることである」[41]、という。この発言はこの直前の発言のくり返しにすぎないことは、指摘するまでもないが、このようなくり返しは、『テトス説教』に時折見出される。このようなくり返しは素朴な聴衆を納得させるためにはやむをえないやり方であろう。さて、こうして人間が神の子となるのと同時に、人間がアダムにおいて神の怒りをうけて永劫の罪の子となった原因の罪過は取り消され、それに代って人間は再生において恩寵と救いの子となり、したがって、「義認は再生の一部分であり、そしてしばしば義認は再生と呼ばれる」[42]、というのである。さらに堕罪の子と神の子について若干の説明が続くが、その紹介は省略する。

さて、「再生に属する第三のものは、新しく創造された者（二コリ五―十七、ガラ五―十五）、肉に対置される霊（ヨハ三―六）であって、それはまた内なる人間あるいは新しい人間と呼ばれる」[43]、という。この内なる人間あるいは新しい人間は、すでに見たように、シュペーナーのキリスト教のすべてが存立するところのものであるが、具体的にそれはどういう人間であるか、彼は右の引用につづいて詳しく描く。まず、再生した人間といえども、罪深い本性を完全にとりのぞかれているのではない、という。「神は再生において、私たちが私たちのうえに、また私たちのなかに、引きこんだ罪深い堕落のいっさいを、私たちから取りのぞいてしまうほどには、私たちの本性を浄化しないので、私たちは生涯の間まだ罪深い本性を身につけ、持ち回っている」[44]。このような人間に対して神はさらに働きかける。「それにもかかわらず、神は私たちに天に由来する新しい善い力を、新しい性質を、神の本性を与え（二ペト一―四）、それと同時にその人間全体を変えるのである」[45]。このように再生して変えられた人間は、うちに天来の光が点じられ、その照明をうけて、この世での必要度に応じて神の言葉とその秘密を理解し神を認識できるようになる。

ところで人間の意志はその古い誕生ゆえに悪であり、悪に好意的なので、自分ひとりでは善を欲することも行なうこともできない。しかし再生によって人間の意志には、天来の力と恩恵が与えられ、それで人間は善を欲しまた行な

うことができる。再生した人間にもまだ古い人間が完全に取り除かれてはいない。「従って、再生した人間には常に二重の意志がある。その自然のままの性質にしたがえば、人間は善を行なう意欲をもたず、もしなにか善事をしなければならない時にはいやいやすることになり、したがってその行ないは善くない。その一方で人間は悪を好み、それも必ずしも外的に好むだけではない。悪をやめなくてはならない時には、心の中で悪を行なうのである。これは疑いもなくパウロが言うところの、自分のうちには、つまり肉のうちには、善いものはなにも住んでいない（ロマ七―十八）、ということである。他方、再生と恩寵にしたがえば、人間は悪を好まず、そして自分のうちに持ち感ずるところの罪を憎み、代りに善を行ないたいという欲求と願望をもっていて、事実またそれをできる限り実行する。従って、再生した人間には常にいわば二重の人間が、つまり古い人間と新しい人間が付いていて、互いにいつも敵対しあっている。そこで、神が人間の意志の中に目覚めさせた悟性の光、善なるものは、魂と体のなかにあるすべての善い力とあわせて、人間のうちにある霊、あるいは内なる人間と呼ばれるのである。それに対して、まだ自然のままの人間の中にひそんでいる悪は、肉、古いアダムと呼ばれる」[46]。

おのれのうちなる二つの魂の相剋、これはゲーテの『ファウスト』の例をあげるまでもなく、ドイツの文学では永遠のテーマであるが、この『テトス説教』もまたその宗教的原型を示すものといえよう。この相剋をどのように解決すべきかがシュペーナーの課題であるが、この相剋が古いアダムでなくて内なる人間の、つまり肉の誕生ではなくて再生の勝利に終らなくてはならないことは、説明を要しない。人間には再生は信仰によって神から与えられる。人間自身はこの相剋に関与することができるのかどうか、この問題についてシュペーナーの考えを探ってみなくてはならないが、そこで注目されるのが、改新である。彼はこの第四項の最後でこう述べる。「上に述べたように、新しい人間と並んで古い人間が残っていて、その古い人間は死とともに初めて脱ぎ捨てられる。そして私たちはたしかにこう言いたいところであるが、すなわち、その人間の全体が再生した、つまり再生と新しい本性の力はその人間の一部分

にだけはいりこんでいるのではなくて、全体にひろがっているので、魂、悟性、意志、情緒および身体に新しいものが存在する、と言いたいところであるが、しかしまだ必ずしもその人間の全体というか、あるいはその人間におけるすべてが再生したのではない、つまり、そのような諸々の力すべての中には善い、新しい本性と並んで、古い本性のいくばくかが、優勢ではないにせよ、見出されるのである。再生した人間たちのもとにまだ残っているこの悪い本性に働きかけて、それを除去し、その人間を生涯にわたって浄化しようと努めるのが聖なる霊であり、そしてこのことを改新というのであって、改新はその人生の最期に初めて終了する、というかあるいは、永遠への門に到達するのである。とはいえ、古い人間が再生した者のもとにはまだ残っていて、神のお気に入られなくとも、再生した人間がすることは、それがたしかに肉のゆえに不完全であり、弱々しい歩みのものであっても、神の霊によって創りだされた霊のわざであるから、神のお気に召すのである[47]」。

要するに、再生した人間は、再生に際して神から分与された霊によって自分自身の浄化と救済に関与できるのであり、この営みを改新と呼ぶ、というのである。この問題を『キリストの教えの素朴な解説』は次のように説明する。まず、「再生のあとに何が続いて行なわれるか」という問いをかかげ、こう答える。「改新が行なわれる。つまり、人間がいったん霊的生命を受けとると、それは改新において常に継承され、そしてまだ残っている悪は、すべての悪い性行とともにしだいに脱ぎ捨てられる[48]」。さらに次の、「それでは、再生と改新は互いにどのように区別されるか」という問いに対して、「再生は霊的生活の開始であるが、改新はその継続である。（中略）私たちは信仰を再生によって受領し、改新によって照明する。再生はひとり神とその恩寵によってのみ行なわれ、改新はそれに加えて、人間に贈られた新しい諸々の力によっても行なわれる[49]」、というのである。

再生は、すでに見たように、それ自体では完成した事柄ではあるが、しかし不滅ではない。『テトス説教』の第五項はこう述べる。「しかし、なお注意すべきは、この再生が悪意ある罪によって、あるいは信仰の衰退によって、再

び失なわれることがありうるということである。神が人間のなかに働かせ始めた善を人間が見守り、育成することをやめると、善は次第に微弱になり、最後には霊すなわち新しい人間は息絶える。あるいは人間が霊の欲動に反して悪意ある罪を行ない、罪をかたくなに続けるならば、それによって霊すなわち新しい人間もまた殺される。（中略）新しい人間は、再びその生まれながらの肉の出生に従って、未再生のものとなる。彼はもはや神の子ではない。彼の悟性と意志は再びむかし同様の悪であり、いっさいの善は彼のもとから消えさっている。（中略）それにもかかわらず、彼は再び回心することが可能であり、また実際に改めて再生する。ただし、それは洗礼を再び受けることによってではなく、すでに受けた洗礼によって証される神の言葉によってである。このようにして人間は、霊的に死んで神の恩寵が完全に失なわれてしまっても、再び回心すれば、そのたびに再生する。この新しい再生は日々の改新とは異なる。改新においては私たちはまだ霊的生命のなかにある。ただし弱い者として、ちょうど病む者が薬を必要とするように、強化を必要とするのであるが（後略）[50]」。

『テトス説教』最後の第六項は、人はどんな目印によって再生しているかどうかを知ることができるか、という問題を扱うが、その主な兆候は二つあるという。一つは、「いっさいの［人間の］わざとその功徳をしめ出してただ一つキリストの功徳のみへの信頼[51]」を感ずることであるという。なぜならば義の人、再生した人は信仰のみに生きる（ハバ二―四）からであり、未再生の者、肉の人間は自分のわざによって神を宥めようと思うが、それは空しい努力である。再生した人びとは信仰によってのみ生きるが、それは自分たちのわざの無能と信仰による義の卓越を認識しているからである、という。

二番目の目印は、「新しい生活、肉ではなくて霊に従う生活（ロマ八―一・四）と日々の改新[52]」であり、そして霊によって始められた善いわざが日々の改新によって継続されなくてはならないという。シュペーナーはさらにこう言う。「すでに私たちが聞いているように、再生は新しい霊的生活、新しい霊的な力を与えてくれる。従って人間はそ

れを用いなければならない、さもないとそういう生活は再び失なわれてしまう」[53]。この発言で注目されるのは、その内容ではなくて「なければならない」müssen という必要ないし義務をあらわす助動詞である。この助動詞の使用によって、再生の目印としての新しい生活は、要望ないし義務としての生活に転化する。要望ないし義務はまた「ならば」という仮定法の形でも示される。「私たちが肉の邪悪な欲望を抑えようと日々努め、欲望に支配権を振るわせず、欲望を満足させず、肉を欲望や欲情とともに十字架につけるならば（ガラ十六―二五）、世に打ち勝つならば（一ヨハ五―四）、あるいは私たちが世に打ち負かされたときそのつど再び起きあがって、再び世と闘うならば、彼は、あるいは私は、霊的生命をもっている、と認められる」[54]。さらに「私たちが二枚の石板（＝モーゼ十誡）に従って、神が与えてくださった力のかぎり、神と人間に対して従順と善行を心がけ、それも外的な醜悪、悪徳を警戒するだけではなくて、いっそう多く内なる思考に向うよう、ただしそれに沈潜してしまわないよう、努めるならば。同様にまた、ただ外的に善を行なうだけでなく、心の中に善があることを求め、私たちをお召しになる聖なるお方に倣って生活のすべての面において聖なる者であるよう（一ペト一―十五）願って、つとめて敬虔な気持になり、［神から心の中に送られた］霊によって、『アッバ、父よ』と叫ぶ（ガラ四―六）よう、神の言葉への愛を［育くみ］、神の言葉をたびたび聴き読み考え、しばしば熱烈に祈り、俗世を軽蔑し天にあるものに心をとどめ、地にあるものに心を惹かれず（コロ三―一・二）、最後の救済を待ち望み（ロマ八―二三、フィリ三―二十）、慈父のような神の配慮に子供のように信頼して、神が私たちに与えて下さるすべてのものに満足し、というのも、神は私たちが必要とするものすべてをご存じ（マタ六―三一・三二）だからであるが、さらに隣人たち、とりわけ兄弟たちへの愛（これが一番大切な目印としてあげられる。一ヨハ五―一以下、イエスが救い主であると信じる人はみな神から生まれた者である。そして自分を生んで下さった方を愛する人はみな、その方から生まれた者たちをも愛する。このことから私たちは、私たちが神を愛し、神の掟を守るときには、神の子を愛していることが分かるのである。一ヨハ三―十、だれが神の子で、だ

れが悪魔の子であるか、明らかである。正しい生活をしないものは、神に属さない。自分の兄弟を愛さない者も同様である）を、神が私たちに送り届けて下さるものすべてに忍耐を、神の名誉のために熱意を、私たちと他の者たちにおいて神の名誉を促進し、日々の悔い改め等々。また特に生活のすべてに勤勉を。私たちは私たちの主イエスの姿にだんだん似てこなければならないのだから、そのことをそのつど思いだして、イエスの手本にならって私たちの生活を送るよう、同時にまた、私たちはイエスの生徒であるばかりでなく、イエスのあとに従うものになって、イエスに学ばなければならない（マタ十一―二九）。この勤勉が心の正直のうちに見出されるならば、それは間違いないしるしである。というのも、キリストの生活は新しい人間にとって手引であり指図であり（ロマ六―四・五・八・十一）、また特に、自分はキリストのうちにあると言う人はまた、キリストが歩いたと同じように歩かなくてはならない（一ヨハ二―六）。しかし自分は救い主の手本に従うことを望まないけれども、キリストの功徳には与かりたいものだと思うならば、これは、そのような人間は未再生であることの確かな証拠である」[55]。このように再生の目印は、敬虔な生活実践の要望ないし命令となる。以上で『テトス説教』の本文は終って、あとに祈りの言葉が来るが、その紹介はここでは省略する。

シュペーナーが再生論を形成するに当って多くの先人たちから影響を受けたことは確かであるが、ここでは特にルターとアルントのそれぞれの考えとシュペーナーのそれを比較してみよう。まずルターであるが、彼の『小教理問答書』の「洗礼の秘蹟」についての三番目の問答はこうである。「水がどのようにしてそのような［人間を救うという］大いなる事をすることができるのか。答、もちろん水がそういうことをするのではなくて、水とともに水のもとにある神の言葉と、このような神の言葉を水において信頼する信仰がそれをするのである。というのも、神の言葉がなければ水はただの水であって、洗礼ではないが、しかし神の言葉とともにあれば水は洗礼である。つまり恩寵ゆたかな

生命の水であり、聖霊における新しい誕生の水浴である。それはパウロがテトスへの手紙第三章に言うとおりである」、と述べて、同章五―八節を引用し、最後に、「これは間違いなく真実である」[56]と言う。この問答につづく第四の問は、「そのような浸水洗礼は何を意味するか」といい、その答がシュペーナーの『テトス説教』に引用されていることは、すでに見たとおりである。ただ、シュペーナーはこの答を、パウロが一息に言うところの「聖霊による再生と改新の水浴」のうちの改新にだけ関連すると解釈しているが、ルター自身は再生と改新をそれほど厳密に区別しているように見えない。別の箇所（『一五三五―一五三七年の五つの学位試験討論のためのルターの論題』）で彼はこう述べる「65・義認はまことに改新のための再生である。ヨハネ（ヨハ一―十二、一ヨハ五―一・十三）は、『その名を信じる者たちは』云々、『神から生まれた者たちである』と言う。66・それゆえパウロもまた洗礼を『再生と改新の水浴』（テト三―五）と呼んでいる。キリスト自身こう言う、『人は新しく生まれなければ、神の国を見ることができない』（ヨハ三―三）」[57]。

同じ「再生と改新」の語句の解釈に、ルターとシュペーナーの間で微妙な差異があるようである。シュペーナーの場合は、すでに見たように、まず再生が行なわれてそれに続いて日々の改新が行なわれなくてはならないという解釈であるが、ルターは両者を表裏一体のものとして捉え、「改新のための再生」を「新しい人間になるための生まれ変り」と理解しているように思われる。

次にアルントの場合を見ると、彼の『真のキリスト教』で「再生」という語はあまり使われていないが、その少数例の一つが同書第二巻二四章に見出される。すなわち、「このようにして私たちは信仰によってキリストから再生して神の子となり、そして息子（＝キリスト）のうちに息子とともに息子たち、子供たちになる」。一方、「改新」すなわち「新たにされること」はかなり頻繁に現われる。たとえば第一巻三章は、「どのようにして人間はキリストにおいて再び新たにされて永遠の生命を得るか」という題のもとに新しい誕生すなわち新生すなわち「再生」の問題を扱

うのである。まず、「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは新しく創造されることである（ガラ六―十五）」という句を引いて、続いて、「新しい誕生は神のわざ、聖霊のわざである。それによって人間は怒りと刮罰の子から恩寵と救いの子となる。信仰と言葉と秘蹟によって、罪の子から義の人になる。それによってまた私たちの心、気持と心情、分別、意志および情動は、イエス・キリストのうちにキリストにかたどって改新され、照明され、聖化されて新しい被造物になる。というのも、新しい誕生はそれ自身のうちに二つの大きな恩寵、つまり義認と聖化すなわち改新を含むからである」、と述べてそして、「『テトスへの手紙』第三章五節［を見よ］」と言うのである。「聖化」と「改新」の意味内容はほぼ同じと考えられる。そこで明らかになるのは、「新しい誕生」すなわち再生が義認と改新をうちに含んでいることであり、そしてこの点をシュペーナーの再生理論がとりいれているのである。

再生の思想の源泉は、今見たようにルターも引用している、「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることができない」というキリストの言葉に見出される。シュペーナーは『再生の不可欠性について』の説教で、「神の国を見るということは何であるか、もし私たちが手短かに言い表わそうとするならば、それはこの世と永遠の世で至福を得ることを意味する」[58]と述べているが、この解釈は、人間がすでに現世において至福すなわち救済を得る可能性を示すものであって、そこから再生が現実的な意味を帯びることになる。同じ説教で彼はこう述べる。「私たちがみ言葉そのものの力によってすぐに気づくのは、こうして、再生とはある現実の事柄であり、それによって人間のうちに何かがつくりだされて、以後ずっと存在しつづけるということであるが、それに対して義認においては、そのようなことは行なわれない。義認は、人間がふつうは持っていないものを当てにするのみで、そして人間に実際に備わっているものを当てにしないので、人間のうちに現実的な変化ないし確信できるものの創造をもたらさない。この確信できるものは、再生においては不可欠的に存在しなければならないのである」[59]。

以上の考察から、シュペーナーの敬虔主義理論において「再生」がその中枢をなす観念であって、それはルターの宗教改革理念の根幹であった「義認」に代るものであることが、明らかであろう。と言っても、それは義認すなわち信仰による義の否認ではない。彼は義認を尊重しつつ、それを再生の一部に組みいれた、というか、あるいは、再生の構成要素の一つとしたのである。再生の観念はシュペーナーによって初めて案出されたものではなく、すでにパウロが表明している（テト三―五）ことは言うまでもない。ルターもアルントもそれを確認していることは本節で見たとおりであるが、しかしルターは義認を最も重視し、アルントは「改新」に力点を置いた。それに対して再生に最大の重点を置いたのがシュペーナーである。彼は、再生によって人間が（来世においてのみならず）すでに現世においても救済される可能性を見出した。彼の敬虔主義はまさにこの可能性を現実化する方法の探求と実践であった、と言うことができよう。

注

（1）Johann Arndt : Postilla, 1616.

（2）Philipp Jacob Spener : Pia desideria, hrsg. von Kurt Aland, 3. durchges. Aufl., Berlin 1964, S. 3.

（3）アラントは、一六七五年秋ではなくて、一六七六年秋に初めて出版された、と推定する。

（4）ヨーハン・ハインリヒ・ホルプとヨアヒム・シュトル。

（5）Pia desideria, in : Hauptschriften Philipp Jacob Speners, bearbeitet u. eingeleitet von Paul Grünberg, Gotha 1889.

（6）Pia desideria, in : Das Zeitalter des Pietismus, hrsg. von Martin Schmidt u. Wilhelm Janasch, Bremen 1965.

（6a）シュペーナー著・堀孝彦訳『敬虔なる願望』、佐藤敏夫編『世界教育宝典（キリスト教教育編）』Ⅴ所収、玉川大学出版会　一九六九年。

(7) Martin Luther : An den christlichen Adel dentscher Nation von des christlichen Standes Besserung 1520, WA 6, S. 405.

(8) vgl. Martin Schmidt : Speners >Pia Desideria<. Versuch einer theologischen Interpretation(1951), in : Martin Greschat (ed.) : Zur neueren Pietismusforschung, Darmstadt 1977, S. 115 f.

(9) D. Martin Luther : Die gantze Heilige Schrifft, Bd. 3, hrsg. von Hans Volz, München 1974, S. 2356.

(10) Martin Schmidt : a. a. O., S. 117.

(11) David Chytraeus(1531-1600)　ルター派神学者、ロストク大学教授。

(12) Justinus. サマリアに生まれ、プラトン哲学を学び、キリスト教徒になった。一六五年ローマで殉教死をとげた。

(13) P. Grünberg : a. a. O., S. 26.

(14) 伊藤利男『敬虔主義の範例と先駆――若きルターとアルントの場合――』、九州大学文学部『文学研究』第八十九輯（平成四年）所収。

(15) Luther : Epistel oder Unterricht von den Heiligen an die Kirche zu Erfurt, 1522, WA 10,Ⅱ, S. 165 f.

(16) Luther : Der kleine Katechismus, WA 30,Ⅱ. S. 372.

(17) Luther : Die gantze Heilige Schrifft, Bd. 3, S. 2258.

(18) Johann Arndt : Vier Bücher vom wahren Christentum, 2.Buch, 4. Kapitel.

(19) Luther : Vorrede zum l. Band der Wittenberger Ausgabe der deutschen Schriften 1539, WA 50, S. 657 f.　なお、[・・・]はシュペーナーが省略した箇所を示す。

(20) Luther : Vorlesung über die Stufenpsalmen 1532/33, WA 40, Ⅲ, S. 361.

(21) "Die Teutsche Theologi"(Theologia deutsch). 氏名不詳の著書により一四三〇年ころ、神と神秘的合一について書かれたドイツ語の書物。ルターにより発見され、命名されて、一五一八年完本が出版された。

(22) Johannes Tauler (ca. 1300-61). ドイツの神秘主義者、ドミニコ会士。エックハルトの影響を受け、ルターに影響を与えた。シュペーナーは一六八〇年にタウラーの著作集への序文を書いた。

(23) "Nachfolgung Christi"(Imitatio Christi). 中世末期の十四五世紀ころ書かれた神秘主義的な信仰促進書。長いあいだ Thomas à Kempis(ca. 1380-1471) の著とされてきたが、近年オランダの Gerrit Grote(1340-84) を著者とする説が生まれた。

(24) 注（14）を参照のこと。

(25) Luther : Die gantze Heilige Schrifft, Bd. 3, S. 2256.

(26) a. a. O., S. 2137.

(27) Luther : Von der Freiheit eines Christenmenschen 1520, WA 7, S. 21.

(28) Einfältige Erklärung der christlichen Lehr nach der Ordnung des kleinen Catechismi des teuren Manns Gottes Lutheri 1677, eingeleitet von Werner Jentsch, in : Philipp Jacob Spenner : Schriften, Bd. II. 1, hrsg. von Erich Beyreuther, Hildesheim 1982.

(29) Von der widergeburt aus Tit. 3/5. 6. 7., in : Kurtze Catechismuspredigten 1689, eingel. von W. Jentsch, in : Ph. J. Spener : Schriften, Bd. II. 2, hrsg. von E. Beyreuther, Hildesheim 1982.

(30) Spener : Erste geistliche Schriften 1699(Aauszug), in : Das Zeitalter des Pietismus, hrsg. von M. Schmidt u. W. Janasch, Bremen 1965.

(31) Spener : Der Hochwichtige Artikel von der Wiedergeburt. . 1701(Auszug), in : Das Zeitalter des Pietismus.

(32) Spener : Von der Wiedergeburt Notwendigkeit, in : Das Zeitalter des Pietismus, S. 44 f.

(33) Spener : Schriften,Bd. II. 2, S. 516. (34) a. a. O., S. 516.

(35) Luther : Der kleine Katechismus, WA 30, I, S. 382 f.

(36) Spener : Schriften, Bd. II. 2, S. 517. (37) a. a. O., S. 517 f. (38) a. a. O., S. 519. (39) a. a. O., S 519. (40) a. a. O., S. 519. (41) a. a. O., S. 519. (42) a. a. O., S. 520. (43) a. a. O., S. 520. (44) a. a. O., S. 520. (45) a. a. O., S. 520. (46) a. a. O., S. 521. (47) a. a. O., S. 522. f.

(48) Spener : Schriften, Bd. II. 1, S. 738. (49) a. a. O., S. 739.

(50) Spener : Schriften, Bd. II. 2, S. 523. (51) a. a. O., S. 523. f. (52) a. a. O., S. 524. (53) a. a. O., S. 524

(54) a. a. O., S. 524. (55) a. a. O., S. 524. f.

(56) Luther : Der kleine Katechismus,WA 30, I. S. 381 f.

(57) Die Thesen Luthers für fünf Promotionsdisputationen 1535-1537, WA 39, I, S. 48 f.

(58) Das Zeitalter des Pietismus, S. 45. (59) a. a. O., S. 45.